

デーファ劇映画大事典

東ドイツ製作劇映画の全記録

1946～1993年

〈上〉

A-L

F. B. ハーベル編著

レナーテ・ビール共著

監】 = 監督 **共監】** = 共同監督 **助監】** = 助監督 **脚】** = 脚本、脚色、シナリオ **原】**
= 原作 **撮】** = 撮影 **共撮】** = 共同撮影者 **特撮】** = 特殊撮影 **アニメ】** = アニメーション映像 **音】** = 音楽 **協】** = 協力（作品の構想、シナリオ作成、選曲、編曲等） **衣】**
= 衣装 **美】** = 美術監督（大道具、小道具を含む） **編】** = 編集 **編務】** = 編集事務
注】 = 注釈 **制】** = 制作者、制作主任 **長】** = 作品の長さ（「m = メートル」及び「分」表記）
仮題】 = 制作開始時に仮に付けられた作品名 **原題】** = 制作開始時に付けられた作品名
TV放】 = テレビでの最初の放映日 **制社】** = 制作会社、制作グループ **共制】** = 共同制作会社
委託】 = 制作等の委託会社 **配】** = 配給会社（主にデーファでない場合）
仕上】 = 仕上げ加工 **封切】** = 映画館等での上映開始日 **場所】** = 封切りされた場所（映画館等）
出】 = 出演者 **ナレ】** = ナレーション **歌】** = 歌唱

brw = ワイドスクリーン

cine = シネマスコープ（アナモルフィックレンズ使用のワイドスクリーン）

lto = 光学サウンド

4kmgf = 4チャンネル磁気テープ録音

mgt = 磁気テープ録音

6kt = 6チャンネル録音システム

Tovi = トータルビジョン（東ドイツ独自のシネマスコープ）

標サ = 標準サイズ

- ・日本で一般公開済み、あるいは特集上映等で既に邦訳の題が使われた場合、また有名な文学作品の映画化については、それらの題名を活用し*印を付記した（ただし表記の一部変更も含む）。
- ・ドイツ語以外の映画の原題名（露語、チェコ語等）には日本語訳を付けていない。
- ・人名、地名、国名等のカタカナ表記は、日本で広く使用されているものを最優先したが、基本的にはドイツ語の発音に近い形にした。
- ・写真のキャプションでは、特記の無い場合、人物名は左から記載している。
- ・「**批評**」の典拠について、原書の通り批評家名をイニシャルや仮名等で表記している場合がある（例えば「J. B.」「H. U. E.」「emjot」「mtr.」「-Kell」等）。

上卷

A 8
B 71
C 129
D 148
E 184
F 226
G 286
H 335
I 387
J 411
K 444
L 504

下卷

M 558
N 629
O 652
P 663
Q 690
R 691
S 738
T 888
U 944
V 976
W 1008
Z 1051

付録 A 1080
付録 B 1101
付録 C 1114
付録 D 1129

「秀作を求める苦悩」

はじめに

デーファ (DEFA = ドイツ映画株式会社) は、半世紀近く活動していた映画会社というだけではない。もう一つのドイツ DDR (ドイツ民主共和国) が存在した 41 年間、国営の映画製作会社であった。政治的使命と芸術的自由のはざま、時にはスマートに、時にははぎこちなく、バランスをとってきた。デーファは、いわゆる映画製作会社の単なる略称ではない。デーファの映画は、映像作品であると同時に政策プロパガンダでもあり、秀作を求める一方で常に苦悩が付きものであった。47 年間、東ドイツでは、ほぼ例外なくデーファ社の名前の下に映画が作られた。第二次大戦後、ソ連軍占領地域で「ドイツ・ソビエト株式会社」として創設され、東ドイツ時代にはポツダム市バーベルスベルクに本拠を構える国営の映画製作会社となり、更に統一後のドイツでは有限会社となって、それまでの登録が抹消された。デーファは何千本もの映像作品を製作したが、そのうち 700 本を遥かに超える劇映画が映画館で上映され、その他にも一般向け科学映画、ドキュメンタリー作品、特撮アニメーション、週刊ニュース、短編映画等がある。もちろん、膨大な作品数の中には重要ではないものや失敗作も含まれるが、娯楽性の高いもの、様々な形で製作当時の社会に一石を投じるもの、あるいは議論のテーマを提供するものも相当数ある。

デーファの経営管理委員会に対する正式な営業権引き渡しは、1946 年 5 月 17 日、奇しくも戦禍を免れたベルリンの劇場「アドミラル宮殿」で行われた。デーファ社の経営陣は、観客の娯楽への欲求に配慮する一方で、時代に沿った、芸術性に富む実験的映画を多く含む製作プログラムを進めた。デーファ初期の作品は、こうした要求を考慮したものであった (もちろん、実験的な作品が後回しにされたことは否めないが)。

既に上記権利譲渡の前年から、創立予定であったデーファ社では製作活動を開始していた。ソ連製作映画の吹き替え作業、週刊ニュース「目撃者 (*Der Augenzeuge*)」の取材、そして 2 本の劇場用映画『*FREIES LAND* (自由な土地)』と『*DIE MÖRDER SIND UNTER UNS* (殺人者は我々の中にいる)』がクランクインした。こうして始まったデーファ社が、その後引き続き製作した劇映画を網羅したのが、この大事典である。ヘルヴィヒ・キッピング監督の『*NOVALIS – DIE BLAUE BLUME* (ノヴァーリス – 青い花)』が、伝統あるデーファ社のロゴマークを付けて製作された最後の作品となり、同 1993 年に同社の登録は抹消され、その幕を閉じた。

本書は、1994 年にポツダム映画博物館のスタッフがヘンシェル出版から刊行した大著に依拠するところが大きい。『*Das zweite Leben der Filmstadt Babelsberg* (映画都市バーベルスベルクの第二の生)』は、詳細で徹底した内容である。デーファ財団の好意ある了解の下、本書のスタッフリストとストーリーは基本的に上記大作を引き継いでいる。とりわけ「ストーリー」の大半は、ジャーナリストのレナーテ・ビールの執筆によるもので、ここに改めて感謝したい。署名の無い「ストーリー」については、全て彼女の記述によるもので、それ以外は著者のイニシャル (f.b.h.) を記した。

しかし他方で、『映画都市バーベルスベルクの第二の生』は映画の歴史書として構想されたため、一当該大事典とは全く異なり— デーファ劇映画スタジオの製作史上、特に重要な時代

に関する記述が主で、作品自体について詳しい説明の無いもの、あるいは評価の不十分なものも見受けられる。また、前述の発行年以降、デーファの歴史について更に深く掘り下げた内容の出版物もある。そのため、より新しい情報を本書に盛り込むことが可能となった。

実際この大事典では、これまでに出版されていた同類の書に不足していた部分も補うように努力した。デーファ社は、東ドイツで唯一の劇映画製作会社という訳ではなかった。一時期「東ドイツテレビ」という会社名であった「ドイツテレビ放送 (DFP)」は、独自の劇映画作品を多数製作し、デーファにも委託していた。これら委託作品の割合は多くはないが、デーファ作品として映画館上映にまで至ったものは、全て本書に採用している。その場合、発注元は DFP であったが、ソ連等社会主義国、あるいは西ドイツの映画会社のために、デーファが全編または作品の大半を製作していた。最初に東西両ドイツが共同で製作したのは、東ドイツの作家エーム・ヴェルク原作の映画『*DIE HEIDEN VON KUMMEROW UND IHRE LUSTIGEN STREICHE* (クメロウの異教徒たちと彼らの愉快ないざづら)』(1967) である。この作品も、デーファ社で製作された他の西ドイツ映画と同じく本書で紹介している。ただし、これら共同製作については、協力関係が複雑で資料の入手も難しく、デーファ社が実際どの程度まで関わっていたのか、全てを明らかにすることは不可能であった。2017 年発行の当新版は、これらを出来る限り追記したものである。

本書での記述は、全体としてデーファ劇映画撮影所に関するものである。ただ余り知られていないが、デーファ社のドキュメンタリー映画撮影所も (数十年の間に何度も名称変更を行った) 頻繁に劇映画 (多くは短編作品) を製作している。これらについても、映画館での上映に足りる長さの作品は全て本書で考慮し採用した。もちろん、前述のように資料は不完全で、充分補完することは出来なかった。

本書の付録では、デーファ製作で 1 時間に満たない短い劇映画も紹介している。その際、作品の長さは 1600 m (約 55 分) が上限である。それ以外にも、長編作品上映に先立つ「前座」プログラムとして、相当数の短編劇映画が作られた。その中で最も有名な作品は、1953 年から 1964 年まで様々なデーファ撮影所で製作していた「ハリネズミ (*Stacheltier*)」プロダクションの風刺映画である。これら短編については内容も豊富、かつ複雑であるため、今後本書が増刷される場合に改めて追記したい。未完に終わった作品、あるいは完成したが公開されなかったデーファ社の劇映画は同じく付録内で扱っているが、製作中止となった企画については、その全ての記録が既に公表されているとは言えないことを、まずお断りしておきたい。

なお、付録 C は特別編である。ここでは、テレビ番組として作られた劇映画のうち放映後に劇場公開された作品群が紹介されているが、デーファ映画ではなく DFP 独自の作品として製作されたものである。どの作品が映画館の上映許可を受けたかを確認することが出来る。しかし、幾つかの例で、実際に許可されたのかが不明なもの、あるいは疑わしいものは本書には採用していない。

更に、付録のうち新規の項目は、いわゆる「過渡期」の作品である。これらは終戦前のドイツ、あるいは大戦中併合されていた領土で、製作は開始したが、完成しなかったか、その他何らかの理由で劇場公開に至らなかった映画である。それら作品のほとんどは、終戦後になって、デーファ社や他の製作会社によって手が加えられ、公開された。ごく一部には、追加撮影が行われ、ドイツ語に吹き替えられた作品がある。これらのうち、どれがデーファ社によって製作されたかについての詳細は専門書でも明確でない。そのため、この点について全てを網羅して

いる訳ではない。それら欠落部分の補足に関して、またその他の指摘があれば、著者、出版社共に大変ありがたく思う。

この大事典は、テレビ、DVD、特集上映等でデーファ映画を鑑賞して下さる観客のための参考書である。著者は、そのために重要だと思われる情報や資料を既存の文献から収集した。例外的ではあるが、各作品の製作に携わったスタッフに不明な点を問い合わせ、確認したものもある。著者にとって（恐らく3分の2以上は見ているが）全作品を見直し、改めて評価することは不可能である。そのため、公開当時あるいは後に発表された批評を基本として、出来る限り多く引用することにした。その結果、非常に興味深いことに、東ドイツの映画評論を概観できる書ともなった。

振り返ってみると、東ドイツの評論家たちは自分の意見を「口外せずに隠す」必要はなかったようだ。もちろん、特定の映画については、全く取り上げないか、否定的な評価をするよう、あるいは一部の雑誌にしか記事を掲載しないように指示が出されていた。また、編集部は必ずしも自由に記者を選ぶことが出来なかった。にもかかわらず、例えば「党に忠実な」評論家が芸術的あるいは政治的に好ましくない映画を熱狂的に支持したり、あるいはリベラル派として知られる評論家が政策的に優遇されている映画の芸術性を非難したりすることもあった。確かに、ドイツ社会主義統一党（SED）関連の報道機関では政治的に「正しい見解」を期待していたが、政局の状況によって、評論家たちは専門誌を通して批判することも可能で、キリスト教民主同盟（CDU）、ドイツ自由民主党（LDPD）、ドイツ国民民主党（NDPD）、ドイツ民主農民党（DBD）など「連合政党」の機関誌上で、時には「無礼ご免の特権的な自由」を謳歌することも出来たのだろう。その一方、複数の出版社が評論記事を掲載している映画について、SEDの公的新聞雑誌が頑なに沈黙を通すとすれば、それは一種の政治問題であった。

当大事典で、著者は可能な限り西ドイツの評論家たちの記事を取り入れる努力をした。この点では、1本の同じデーファ映画が保守的な出版物では酷評されるが、左翼あるいは少なくともリベラルな新聞雑誌では、幾つもの長所が指摘されるという傾向が見られた。西ドイツで発行された出版物の引用で特に重要な位置を占めるのは、ハインツ・ケルステン氏の批評である。ドレスデン出身で1950年代初頭から西ドイツに住み、未だ「ソ連占領区域」というアデナウアー時代からの呼称が根強く残っていた1963年、東西両ドイツ担当の連邦省の求めに応じ、最初の非常に客観的な東ドイツ映画史を書いている。上記ケルステン氏は、1960年代後半からデーファ社のほぼ全作品について評論し、幾つもの西ドイツ紙や西ベルリン駐留の米軍放送「リアス（RIAS）」発行の雑誌に寄稿している。これらの寄稿を纏めた書籍からも多く引用した。

この間、アメリカ合衆国アマーストにあるデーファ映画ライブラリーの英語で書かれた批評文が広く知られるようになった。また、アメリカのジム・モートン氏のインターネットブログも、ありがたく活用した。

幾つかの原則について一言。この大事典は、映画タイトルの冠詞を無視した形でアルファベット順に組まれている。ウムラウト表記（ä, ö, ü）は、それぞれ「ae」「oe」「ue」と考えて配置した。「封切り」及び「放送日」については、何れも東ドイツの劇場あるいはテレビ放映の日付である。作品の長さを表わす「分」は概数で、劇場上映、テレビ放映、あるいはビデオ作品によって若干異なる。東ドイツのテレビ局は1950年代から「ドイツテレビ放送（DFF）」の名称で放映、1990年再び同名に戻された。1970年代に「東ドイツテレビ」と変更されたが、一般に旧名称が引き続き使われていたため、本書では概ねDFFの略称で通している。

映画は一つのメディアである。映画が完成するまで、そしてまた、その影響力を考えると、名前を挙げられていない人々も含め、実に大勢の人々が関わっている。尊敬する仲間たちの貴重な仕事を基盤に、この大事典を出版できたことに感謝している。更に、読者の皆さんが作品に対する明確な評価を楽しみに読んでくださり、一部の時代精神による誤った判断はご寛容くださるものと思う。刺激的で興味深い読み物として本書を手に取り、末永く愛読して下さることを心より願っている。

著者 F. B. ハーベル

A

AB HEUTE ERWACHSEN 『今日から大人』

【監】グンター・ショルツ 【脚】ヘルガ・シューベルト、グンター・ショルツ、アンネ・プフォイファー 【撮】ミヒャエル・ゲーテ 【音】ゲアハルト・ラルツ 【編曲】ユルゲン・バリツキ 【美】ハリー・ロイボルト 【衣】イングリート・モーゲル 【編】ヘルガ・クラウゼ 【制】ホルスト・ハルトヴィヒ 【制社】グループ「ベルリン」 【長】2372 m=87分、カラー、brw、1984年制作 封切】1985年3月14日 【場所】ベルリン、「インターナショナル」 【出】ユッタ・ヴァホヴィアク（ヨハンナ）、クルト・ベーク（グラウバウム）、ダーヴィット・C. ブンナー（シュテファン）、ザビーネ・シュテクリヒ（クリステル）、マリタ・ベーム（公衆トイレ掃除婦）、カトリン・ザース（母親の同僚）、ベアトリス・フォーレリ（ツェツィーリア）、ジモーネ・フロスト、アストリット・クールマイ、エトガー・キューロウ他

ストーリー：シュテファン 18歳の誕生日。彼を一人で育ててきた母ヨハンナは、息子と二人で祝うつもりだ。しかし、シュテファンは一人住まいを始めたいと言い出す。全てを息子のために犠牲にしてきたヨハンナには理解できない。大ゲンカになり、シュテファンは家を出ていく。腕のいい左官見習工の彼は、独立したいと思っている。バーの案内係をしているグラウバウム氏が家具付きの部屋を貸してくれると言うが、ずる賢い彼に利用されるのが心配で、シュテファンは受け入れない。偶然知り合った若い娘たちの中に、混血の可愛いツェツィーリアがいて、女性だけのシェアハウスに一晩泊めてくれる。シュテファンは、その同居人で郵便配達員のクリステルに恋をする。しかし、結婚して家庭を持ちたいと願うクリステルに対して、それは束縛だとシュテファンは思う。自分を模索中のシュテファン。アパートを見つけ、改めて母親との新しい関係を見出す。

解説：始まり方が現実的で、簡潔な会話は心地よく、俳優たちの演技も印象深い。ここ数年の現代劇映画と同様に、若い主役たちと

ロック音楽で、同年代の観客を引き付けようとしている。しかし、制作者たちは実際に存在する世代間対立を描く際、しり込みしている。**批評：**登場人物の内面を深く知ることが出来ない。表面的な部分にしか光が当たっていない。深層心理の描写に欠ける。しかしながら、描かれている日常生活を通して、新聞では報道されない、もう一つのドイツを垣間見ることが出来る。(1985年5月19日 ハイネツ・ケルステン、「日刊シュピーゲル」)

主人公の辿り着く世界のどこにも疑問や矛盾がないのは不思議だ。自分探しの旅をす



ダーヴィット・C. ブンナーとクルト・ベーク (左)



ブンナーとザビーネ・シュテクリヒ

るシュテファンは、絵本の中のような現実に出会うだけ。誤解は短い会話を通して解決し、主人公の行動は「優秀な弟子」として常に報いられる。(1999年 ベーター・グラス、『Kino ist mehr als Film [映画館は映像だけじゃない]』)

コメント：主演のダーヴィット・C. ブンナー（1966年生まれ）は、映画が公開された当時は未だ国家人民軍の兵士で、演技は素人であった。牧師の息子として育った彼は、その後ポツダム・バーベルスベルク映画テレビ大学を卒業し、俳優として活躍。2005年モスクワ国際映画祭で最優秀男優賞を受賞する。

EIN ABENTEUER AUS 1001 NACHT [千夜一夜の冒険]

→ **DIE GESCHICHTE VOM KLEINEN MUCK** 『小さなムックの物語』を参照

DIE ABENTEUER DES TILL ULENSPIEGEL

『ティル・ウーレンシュピーゲルの冒険』*

東独/仏合作 【監】ジェラルド・フィリップ 【共監】ヨリス・イヴェンス 【脚】ルネ・ウィーラー、ジェラルド・フィリップ、ルドルフ・ベーム 【原】シャルル・ド・コステル作小説『Legende von Ulenspiegel und Lamme Goedzak (ウーレンシュピーゲルとお人好しのゲドツァク)』 【撮】クリスチャン・マトラ、アラン・ドゥアリヌー 【音】ジョルジュ・オーリック 【美】レオン・バルサク、アルフレート・トレ 【衣】ロジーヌ・



『ティル・ウーレンシュピーゲルの冒険』エルヴィン・ゲショネックとジェラルド・フィリップ

ドラマール、インゲボルク・ヴィルフェルト 編】クロード・ニコル 制】ジョルジュ・ダンシヘルス、リヒャルト・ブランド 共制】アリアーネ映画、パリ 仏語題】LES AVENTURES DE TILL L'ESPIÈGLE 西独題】TILL EULENSPIEGEL, DER LACHENDE REBELL (ティル・オイレンシュピーゲル、愉快的反逆者) 長】2778 m=102分、カラー、1956年制作 封切】1957年1月4日 場所】ベルリン、「パピロン」出】ジェラルド・フィリップ (ティル)、ジャン・ヴィラール (アルバ)、フェルナンド・ルドゥー (クラエス)、ニコル・ベルガー (ネーレ)、ジャン・カルメ (ラム)、エルヴィン・ゲショネック (シュタールアルム)、ヴィルヘルム・コッホ=ホーゲ (オラニエン)、フランソワーズ・ファビアン (エスベランサ)、エルフリーデ・フローリン (ゼトキン)、マルガ・レガール (カテリーネ) 他

ストーリー：16世紀のオランダ。スペイン王フィリップ2世の占領部隊は、全土で略奪と殺戮を繰り返す。フランドル地方に着いた時、道化者ティルはネーレと婚約したばかり。侵略された土地は荒廃し、ティルの父クラエスは火あぶりの刑で殺される。残酷な出来事を知ったティルは、占領軍と首謀者アルバ将軍に対して戦いを挑む。知恵を使ってスペイン軍を欺き、民衆に抵抗運動を呼びかけ、勝利に貢献する。そして、アルバ将軍が殺害させようとした運動のリーダー、オラニエン王子を助け国の独立を宣言。満足したティルはネーレの待つ故郷に戻る。

解説：これは、東ドイツのデーファ社とフランスの合作映画4作のうち第1回作品に当たる。観客に人気のジェラルド・フィリップが主演ということもあって大好評。既に1947年からデーファ社では、この企画の準備を始めていた。民衆が独立運動の闘士となるという題材は魅力的で、両制作会社に好都合であった。作家ギュンター・ヴァイゼンボルンと共に、有名なハンス・アルバースを主演に希望したベルトルト・ブレヒトが制作実現のために努力した。ジェラルド・フィリップにとっては、久しぶりに勇敢な騎士を演じる絶好の機会であった。

批評：脚本家としてのフィリップは、機知に富んだショットの間を埋める方法を間違ったようだ。監督としてのフィリップは、他の出演者たちの演出に手を抜いた。更に、主演として自分の演技にコントロールが効かず、1950年代に主演した剣劇映画『花咲ける騎士道』さながら、時として前面に出過ぎている。(…)われわれ評論家には、笑い過ぎて腹痛を覚えるが、シャルル・ド・コステルの原作を思い出して悲しい気分になる映画だ。(1957年 カール=エドゥアルト・フォン・シュニッツラー、「フィルムシュピーゲル2」)

オランダのドキュメンタリー映像作家ヨリス・イヴェンスは(…)劇映画の演出は得意でないと悟り、誰にも気付かれないよう静かに撮影スタジオを出ていった。しかし、主演と監督の二役を担うジェラルド・フィリップには荷が重過ぎたのだろう。ド・コステル原作が、どこもなく暗い映画になっただけでなく、ひょうきんな部分と悲劇が上手くかみ合っていない。(1994年 ラルフ・シェンク、『Das zweite Leben der Filmstadt Babelsberg [映画都市バーベルスベルクの第二の生]』)

これは、ヨーロッパの伝説的寓話を両国が正反対の解釈をし、異なる意図で映画化しようとした作品である。物語をスター俳優に合わせようとしたフランス側制作者の野心と、歴史的対立の社会性に重きを置こうとしたデーファ社の見解の違いである。(2009年夏 ギュンター・アクデ、「政治的威信をかけた合作映画」、「映画誌40」所収)

記録：この作品には、ジェラルド・フィリップの主観的な思いが目立つ。(…)主演のジェラルド・フィリップが慣れない演出も同時に行うのは、映画にとってプラスではない。彼はしばしば、オイレンシュピーゲル独特のいたざらと、フィリップ個人のつまらない悪ふざけを混同している。(1956年12月12日 上映許可委員会議事録、2009年夏 ギュンター・アクデ、「政治

的威信をかけた合作映画」、「映画誌40」所収)

コメント：この中世文学の映画化は、ジェラルド・フィリップにとって唯一の監督作品である。彼は1959年、37歳の誕生日を目前にして亡くなった。

-ロケ撮影は、スウェーデン、フランスのニース、東ドイツのビターフェルト近郊ラグーン等で行われた。

DIE ABENTEUER DES WERNER HOLT

『ヴェルナー・ホルトの冒険』*

監】ヨアヒム・クーネルト 脚】クラウス・キュッヘンマイスター、ヨアヒム・クーネルト、アンネ・プフアイファー 原】ディーター・ノル作同名小説(第1部「ある青春の物語」より) 撮】ロルフ・ゾーレ 音】ゲアハルト・ヴォールゲムート 美】ゲアハルト・ヘルヴィヒ 衣】ギュンター・シュミット、インゲボルク・ヴィルフェルト 編】クリスタ・シュトリット 制】ハンス・マーリヒ、マルティン・ゾンアーベント 制社】グループ「ローター・クライス」 長】4493 m=165分、モノクロ、1963/64年制作 封切】1965年2月4日 場所】ベルリン、「コスモス」出】クラウス=ペーター・ティーレ (ヴェルナー・ホルト)、マンフレート・カルゲ (ギルベルト・ヴォルツォウ)、アルノー・ヴィツニエフスキ (ゼップ・ゴムルカ)、ギュンター・ユングハンス (クリスティアン・フェッター)、ペーター・ロイセ (ペーター・ヴィーゼ)、ヴォルフガング・ラングホフ (ホルト教授)、カルラ・ハディモヴァー (ミレーナ)、モニカ・ヴォイトヴィチ (グンデル)、ディー



『ヴェルナー・ホルトの冒険』アルノー・ヴィツニエフスキとクラウス=ペーター・ティーレ



『ヴェルナー・ホルトの冒険』
クラウス・ベーム・フィーレとヴォルフガング・ラングホフ

トリンデ・グライフ (マリー・クリューガー)、アングリカ・ドムレーゼ (ウータ・バルニム)、マリア・アレクサンダー (ゲルティ・ツィーシェ)、ヴォルフ・カイザー (ヴォルツォウ少将)、エーリカ・ペリコフスキー (ヴォルツォウ夫人)、マルティン・フレルヒンガー (弁護士ゴムルカ)、ヘルガ・ゲーリング (ゴムルカ夫人)、インゲボルク・オットマン (ヴィーゼ夫人)、ノルベルト・クリスティアン、ハンス・ヨアヒム・ハーニシュ、A.P. ホフマン、ヘルベルト・ケルプス、カスパー・アイヒェル、ホルスト・ヨーニシュカン、クルト・カヒリッキ、ロルフ・レーマー、ルドルフ・ウルリヒ、ホルスト・クーベ、ギュンター・ナウマン他

ストーリー：ヴェルナー・ホルトとギルベルト・ヴォルツォウはギムナジウムの同級生。1945年春、年若い二人は近付く赤軍の攻撃を防ぐため、ドイツ東部の前線に配属される。積極的なヴォルツォウは小部隊の隊長になり、通信兵ホルトに連隊本部への連絡を命じる。通信業務の途中、過去の重要な出来事を思い出すホルト。ヴォルツォウとの友情の始まり、一緒に志願した軍隊、高射砲助手として初めて見た死者、SS幹部夫人との吐き気を催すような初体験。かつて父の人道主義的な考えは理解できなかったが、徐々に態度が変化する。パルチザン対戦のためにスロバキアに出兵した時、若いミレーナの逃亡を助ける。また、同級生だったゴムルカが何故敵軍に寝返ったのかも理解できる。ロシア軍戦車は攻めてきたが、撃退することが出来た。怖さの余り逃走を試みた16歳の兵士をヴォルツォウが射殺しようとするのを、ホルトは必死で食い止める。その後、ホルトはSS決死隊員を機関銃で次々と銃殺、その場に武器を置いて立ち去っていく。彼を待っている恋人グンデルと新しい生活を始めるために。

解説：長編映画のため制作に長い時間がかかった。ポストプロダクションに入った段階でも、各登場人物にどこまで重点を置いて描くか等、コンセプトに関わる変更が行われた。デーファ作品の中でも、多数の国で上映され衝撃を与えた反戦映画の一つである。

批評：この映画には、直接的描写ではないが物事を具体的に伝える素晴らしいシーンがある。例えば戦闘後の焼け焦げた地にうずくまるホルトが、無意味な「出来事」に驚愕し、強い疑念を抱くシーン。例えばホルトとゲルティ・ツィーシェが人ごみに紛れ、互いを見失うシーン。また、壊れてしまった自分の理想と共に、ホルトがナチ親衛隊員たちを打ち殺すシーンなど。(1965年2月6日ハルトムート・アルブレヒト、「国民新聞」)

彼ら(キューッヘンマイスターとクーネルト、f.b.h.)は、年代順に物語る原作から離れ、二つの話を並行して展開させ、最後に一体化させる手法をとった。それによって、意図的に出来事から一定の距離を保つ。(…)しかし、重要なポイントとして(…)小説の精神と映像の空気感が保たれていることだ。それはヨアヒム・クーネルトの演出に負うところが大きく、時に驚く程に真実味の迫る表現に成功している。このように何気ないシーンの真実性(この作品には、短い味のあるシーンが多く見られる)は、映画の効果を何よりも決定付ける。(1965年2月10日ギュンター・ゾーベ、「ベルリン新聞」)

配役やエピソードの全てが上手くいっている訳ではないが、(…)この映画の並外れた物語

構成により、多くの異なる素材、イメージ、記憶が、一つの長いカットバックを通して、ヴェルナー・ホルトの決断に理解を与える。また、モンタージュ、ストーリー展開の突然の停止、各シーンの簡素化、対照的なプロセスの比較で、映画の中の出来事に特別のアクセントが置かれる。形式的には、幾つかのシーンで『DER FALL GLEIWITZ (グライヴィッツ事件)』(1961)を思い出す。(1965年ウルリヒ・グレゴール、「映画批評3」)

小説と映画の特筆すべき相違点は、その構成にある。この原作は終始一貫した時系列で、ホルトの学生時代から脱走と逮捕に至る結末までを追っている。そのままでは映像化が難しいため、クーネルト監督はフラッシュバックで過去を追うスタイルに変更した。(…)映画評論では、制作者や美術監督が公平に称賛されることは余り無い。原作者は筋書きの設定には関与するが、それ以上のことはしない。『ヴェルナー・ホルトの冒険』へのゲアハルト・ヘルヴィヒの貢献は計り知れない。ヘルヴィヒには、アイデアを絵コンテにする習慣があった。ベストショットを撮るためにクーネルトとゾーレが活用したのが、彼のスケッチだった。例えば、対空砲火銃を使った一連のシーンには、ヘルヴィヒのノートに全く同じ絵コンテが残っていた。このスケッチブックが保存されていたら、彼の関わった映画にこの絵コンテがどの位使われていたかが分かるだろう。ヘルヴィヒは、多くのデーファ映画の影の監督だったのかも知れない。(2012年7月7日「東ドイツ映画ブログ」)

コメント：1960年代から1970年代にかけてベルリンのメトロポール劇場専属のスター女優であったマリア・アレクサンダーがゲルティ・ツィーシェ役、彼女にとって唯一の主演級での映画出演である。

ABENTEUER IN BAMSDORF 『バムスドルフ村の冒険』

児童映画 監] コンラート・ベツォールト 脚] コンラート・ベツォールト、ギーゼラ・ネルトナー 撮] ギュンター・マルツィンコフスキ 音] ハイנטツ=フリーデル・ヘッデンハウゼン 美] エーリヒ・クーリッケ 衣] リディア・フィーゲ 編] イルゼ・ベーターズ 制] アンニ・フォン・ツィーテン 長] 1646 m = 60分、カラー 封切] 1958年4月4日 出] シャルロッテ・キューター (おばあちゃん)、ベルント・クス (トーニ)、ベーター・シュミット (クラウス)、ペトラ・キェブルク (リタ)、クラウス・ベーム (ロルフ)、ギュンター・ヴォルフ (シュティッペル) 他

ストーリー：トーニと妹のリタは、様々な困難を乗り越えて『FAHRT NACH BAMSDORF (バムスドルフ村への旅)』に成功した。しかし、おばあちゃんの忠告に耳を貸すことなく、再び危険な目に遭う。友達同士のトーニとクラウスが洞窟を発見。細い道で帰り道の目印を残しながら中に入っていく。こっそり二人の後を追ってきたリタの頭上で、突然岩がくずれ落ちる。リタは必死でその場を切り抜け二人に合流、一緒に出口を探す。恐怖と不安に



『バムスドルフ村の冒険』子供たちベルント・クス、ペトラ・キェブルクとおばあちゃん役シャルロッテ・キューター

駆られる三人だが、力を合わせて外に続く道を見つけ出す。

解説: 前作『バムスドルフ村への旅』が当たったので、デーファ社は子供の視点で描く冒険物語の続編制作を決定した。しかし、この映画が完成して間もなく、2作品とも余りに個人的で牧歌的な話で、ピオニール団が何の役割も果たしていないと、制作者たちは厳しく批判された。

批評: コンラート・ペツォールト監督は(…)続編でも話を出来るだけ簡単に分かり易くしようと努めた。監督の意図ははっきりと見てとれるものの、もう少し時代性が表現されても良かったのではないか。そうした要素が全く抜けているために、舞台が西ドイツでも撮れる映画になった。楽しくワクワクするのは洞窟内のシーンで、映画の特長が十分に活かされている。映像が多くを語り、セリフは最小限にとどめられている。(1958年J. B.、「家庭と学校4」)

大人たちの影響の下、我々の理想とする集団生活を通して楽しい経験を積むという有意義な休暇の過ごし方とはかけ離れている。現代社会との繋がりが見られない。(…)村が孤立していて、新しい社会主義はまるで存在していないかのようだ。二人の子供の個人主義が前面に打ち出されている。(1958年インゲボルク・クレーン、ピオニール指導責任者として「映画制作者クラブ代表者会議」で語る、「ドイツ映画芸術4」)

コメント: シャルロッテ・キューターは、俳優で監督のパウル・レヴィットと結婚、長年東ドイツ人民議会議員を務める。1950年代から1960年代にかけて、特におばあちゃん役で人気が高かった。

ABENTEUER MIT BLASIUS 『ブラジウスとの冒険』

東独/チェコ合作 児童映画 監] エーゴン・シュレーゲル 脚] ミラン・パブリク、フレート・ロドリアン、ゲアハルト・ホルツ=パウメルト、インゲ・ヴェステ=ハイム、マルツェラ・ピットマノヴァ 原] ヴェルナー・ベンダー作 児童書『Messeabenteuer 1999 (1999年見本市の冒険)』 撮] ギュンター・ヨイテ音] ギュンター・ハウク 美] ボフミル・ポコルニー 衣] ステラ・ドロズドワ、イレネ・パーベ 編] レナーテ・バーデ 制] オスカー・ルートマン、ズデニェク・オヴェス 制社] グループ「バーベルスベルク」 長] 2159m=79分、カラー、brw、1974年制作 封切] 1975年7月11日 場所] プレロウ、野外劇場 共制] プラハ、バランドフ撮影所 出] レオ・スハリバ(ブラジウス)、ヴォルフガング・グレーゼ(ブロックマン教授)、ノルベルト・クリスティアン(大臣)、マリオ・ヴォイティチュカ(エーゴン)、ベトル・スタリー(フランティック)、ディーター・ヴィーン(プラントル博士)、マンフレート・ツェツェ(ピルヴィッツ博士) 他

ストーリー: 技術者が二人、制作中のロボット「ブラジウス」を持ってライプチヒ見本市に向かう。列車の同じコンパートメントに、ライプチヒの友達エーゴンを訪ねるプラハ出身の少年フランティックが乗ってくる。駅に着いた時、ブラジウスが少年二人を連れ去る。人間と同じ姿をしたブラジウスの変った行動を不信に思った少年たちは、彼が犯罪者に利用されていると疑い、逆に誘拐する。プログラミングを間違った二人は、大混乱を引き起こす。ロボットを開発した技術者たちが追跡してくる中、少年たちは見本市会場に到着。大勢の聴衆の前でブラジウスの能力を披露。それは同時に技術者たちの研究成果となる。

解説: 人気の高い子供向け近未来小説を基に、エーゴン・シュレーゲルが劇映画監督としてデビューした作品である。映画テレビ大学時代の卒業制作『RITTER DES REGENS (雨の

騎士)』は不評で未完成に終わった。その後10年近くドキュメンタリー映画の制作を余儀なくされ、この作品で初めて劇映画演出のチャンスが訪れた。原作は20世紀末が舞台であるが、映画では若干様式化された1970年代の話になっている。

批評: 映像美術的には、怪奇小説、ミュージカル、(…)メルヘン、冒険物語の良さが活かされている。とりわけエーゴン・シュレーゲルのリズムカルで抑揚のある映像により、子供だけでなくファンタジーや遊びの面白さを知っている大人にも楽しめる作品になった。(1975年8月21日 エーレントラウト・ノヴォトニー、「ベルリン新聞」)

何れにしても子供向け映画を見て、これほど笑ったことはない。その意味で称賛と喜びに充分値する。(1975年レナーテ・ホラント=モーリッツ、「オイレンシュピーゲル37」)

コメント: 今日的視点で言うと、何とも古くさい「夢」のようなピカピカ光る電球や磁気テープを使った映像技術、意図したものか偶然かは別として、その滑稽さは伝説的TVシリーズ『Raumpatrouille (宇宙船パトロール)』に勝るとも劣らない。



『ブラジウスとの冒険』ブラジウス役レオ・スハリバと子供二人マリオ・ヴォイティチュカとベトル・スタリー

ABSCHIED 『別れ』*

監] エーゴン・ギュンター 脚] エーゴン・ギュンター、ギュンター・クーネルト、コンラート・シュヴァルベ 原] ヨハネス・R. ベッヒャー作 同名小説 撮] ギュンター・マルツィンコフスキ 音] パウル・デッサウ作曲「レクイエム」 美] ハーラルト・ホルン 衣] ヴェルナー・ベルクマン 編] リタ・ヒラー 制] ヘルベルト・エーラー 制社] グループ「バーベルスベルク」 長] 2912m=107分、モノクロ、cine、1967/68年制作 封切] 1968年10月10日 場所] ベルリン、「コスモス」 出] ロルフ・ルートヴィヒ(父ガストル)、カタリーナ・リント(母ガストル)、ヤン・シュピッツァー(ハンス・ガストル)、マティルデ・ダネガー(祖母)、ドーリス・タールマー(クリスティーネ)、ハイデマリー・ヴェンツェル(ファニー)、ボード・クレーマー(フェック)、ヴィルフリート・マツカト(フライシュラーク)、クラウド・ヘッケ(レーヴェンシュタイン)、ユルゲン・ハインリヒ(ハルティンガー)、マンフレート・クルーク(ザック)、アンネカトリン・ビュルガー(マクダ)、カール=ハインツ・コインスキ(クライビヒ)、ロルフ・レーマー(ホーホ)、フレート・デルマーレ、マルティン・フレルヒンガー、アルトゥル・ヨップ、ハンス・クレーリング、ヴォルフガング・グレーゼ、ハインツ=ディーター・クナウプ他

ストーリー: 1914年8月、迫りくる開戦を期待して浮かれる世間をよそ目に、ミュンヘンの中流家庭で育った17歳のハンス・ガストルは心を決める。戦争に協力するつもりは無い。この決断は彼の人生の転機であり、家族や同級生との別離を意味する。しかし、彼の中の「自分が変わる」イメージは曖昧で、公正な社会を実現するために意義ある人生を送ることを意味するだけ。急に思い立ったのではなく、上級検察官の息子として生まれた彼は、上辺の道徳観で



『別れ』ヤン・シュピッツァーとエゴン・ギュンター監督

満ち足りた生活を送る両親に、幼い頃から反抗的であった。同級生のフェックやフライシユラークとの関係では、彼らの勇気に対する尊敬の念と愚行への嫌悪感の間で揺らいでいる。その一方で、ユダヤ人レーヴェンシュタインや若い労働者ハルティンガーへの友情、また、売春婦ファニーへの実らぬ不運な愛を感じている。

解説：東ドイツの元文化大臣ヨハネス・R. ベッヒャー原作の芸文映画は「特別推薦」の評価を受け、ドイツ社会主義統一党の幹部アレクサンダー・アブッシュが脚本執筆に協力した。

しかし、党中央委員会第9回総会で初めて上映された後間もなく、映像の文体が悪いと、当時の東ドイツ演劇同盟副会長ハンス＝ディーター・メーデに冷たく非難された。「新しいドイツ」にも同じく批判的な投書が掲載されたため、この作品は公的には禁止されなかったが、間もなく劇場公開から外された。

批評：ギュンター監督は、歴史映画にしたいと考へた。大胆に様式化した映像は客観性を持たせると同時に、体制に批判的な若者の行動に賛同を示す。(…) カットバックの手法、スローモーションや照明の効果、夢のシークエンス、さらにバーベルスベルク撮影所には珍しく奔放なセックスシーンによって、細かい部分で若干の異論はあるものの、久しぶりに国際基準に見合ったデーファ劇映画が出来上がった。(1968年 ハインツ・ケルステン、『So viele Träume [こんなに多くの夢]』より)

ドイツの中産階級社会を異質なものとして厳しい視点で断罪、腐敗した関係性の意味を探求。愛情のもつれ、狂気と殺人。唯一はっきりしているのは、戦争の否定である。(1994年 クラウス・ヴィシュネフスキ、『Das zweite Leben der Filmstadt Babelsberg [映画都市バーベルスベルクの第二の生]』所収)

最初の映画出演で大人になったハンス・ガストルを演じるヤン・シュピッツァーは、『if もしも …』(1968)に出ているマルコム・マクダウェルの同級生かと思うほど似ているが、ハンスのような反権威主義者には適役だ。シュピッツァーが学んだエルンスト・ブッシュ大学は、現在のドイツでも演劇を専門とする学生たちのための名門校である。彼は多くの東ドイツ映画に主要な役柄で出演しているが、中でも『別れ』のハンスは最高の演技だと定評がある。(…) 薄幸の女ファニー役はハイデマリー・ヴェンツェルである。以前の作品では『DER VERLORENE ENGEL (墮天使)』(1965/66/70)の花嫁など目立たない脇役であったが、本作では初めての大役を見事に演じている。この映画は上映が規制されたため、彼女の好演は余り知られていない。転機となったのは『ZEIT DER STÖRCHEN (コウノトリの時代)』(1971)であるが、彼女が更に有名になったのは『DIE LEGENDE VON PAUL UND PAULA (パウルとパウラの伝説)』(1973)のパウルの妻を演じてからである。(2015年9月7日 ジム・モートン、「東ドイツ映画ブログ」)

コメント：脚本を共同執筆したギュンター・クーネルトは、彫刻家の役で出演している。

ABSCHIEDSDISCO 『別れのディスコ』

監] ロルフ・ロザンスキー **脚]** ヨアヒム・ノヴォトニー、ヴェルナー・ベック **原]** ヨアヒム・ノヴォトニー **一作同名小説 撮]** ヘルムート・グレーヴァルト **音]** ラインハルト・ラコミー **美]** ヨッヘン・ケラー **衣]** バルバラ・ブラウマン **編]** イローナ・ティール **制]** ハーラルト・フィッシャー **制社]** グループ「ベルリン」
長] 2475 m=91分、1989年制作 **封切]** 1990年4月5日 **場所]** ベルリン、「インターナショナル」**出]** ホルガー・クービッシュ (ヘニング)、ダナ・パウアー (ジルケ)、ズザンネ・ゼーヴェルト (ディクシー)、ホルスト・シュルツェ (ヘニングの祖父)、ジェッキ・シュヴァルツ (ヘニングの父)、エレン・ヘルヴィヒ (ヘニングの母)、フリッツ・マルクヴァルト、ダニエラ・ホフマン、アンネリーゼ・マツチュラート、ヴォルフガング・ヴィンクラー、ゲルト＝ハルトムート・シュライヤー、ヴィオラ・シュヴァイツァー、ゲアハルト・ラッホルト、デトレフ・ノイハウス、ベルント＝ウーヴェ・レッペンハーゲン他

ストーリー：15歳のヘニングは、初恋の相手ジルケの死に非常なショックを受け、皆の慰めの言葉を煩わしく思う。褐炭坑地帯の村に住む祖父を訪ねていく決心をするが、炭坑開発のため村全体が立ち退きを迫られている。しかし祖父は老人ホームに入るのを拒否。ヘニングは、その他にも村は危機状態にあると聞く。採掘用パワーショベルが周囲の景色を破壊し、生態系を蝕んでいる。寂れていく村で、様々な人間に出会うヘニング。略奪者、動物を保護し世話する変人、露骨に援助を申し出る閉店間際のディスコの女、無気味な環境の中で愛し合うカップル。自然との関わりで人間が如何に責任を持つべきか、ヘニングの疑問は深まる。結局、彼は学校の友達ディクシーと一緒に、荒廃した土地に木を植え始める。

解説：この題材の映画がデーファ社で製作されるまでに、ほぼ10年が経過した。露天掘りの褐炭鉱が自然環境や社会に与える影響についての話は、長年タブーであった。映画が公開された時、誰も関心を示すことは無かった。

批評：この映画には、幾つかシンボリックの表現が見られる。頻りに映し出される木は、生命、故郷、年齢、尊厳を表す。また、何度も木が伐採される。興味深いのは、隠れた意味を持つ文章が多いこと。例えば、「前進か後退か、もはや誰も知らない」とか、「君らが安全でいられるのは垣根の中だけ…君らの思い通りにすれば、地球は破滅する」。ヘニングが見る幻覚のような異化効果は、時々ざこちなく感じる。その理由は、映画制作には結局お蔵入りになるかも知れないという不安が付きものだから。それが怒りを生み出



『別れのディスコ』ジェッキ・シュヴァルツとフリッツ・マルクヴァルト



少年少女グループ

し、表現に自信が無くなる。(1990年4月23日ウルリーケ・エルスナー、「ラウジッツ展望」)

雰囲気としてはクリモフ演出の『ABSCHIED VON MATJORA (別れ)』(1981)を思い起こさせる。『別れのディスコ』は、このソ連映画ほど極端ではないが、明らかに似ている。(1990年4月11日ヘルムート・ウルリヒ、「ノイエ・ツァイト」)

コメント: ロザンスキー監督は、1974年にもヨアヒム・ノヴォトニーの小説『... verdammt, ich bin erwachsen (困った、僕は大人だ)』を映画化している。

ACH, DU FRÖHLICHE ... 『ああ、何と楽しい…』

監] ギュンター・ライシュ **脚]** ヘルマン・カント、ゲアハルト・ハルトヴィヒ **原]** ヴラチスラフ・ブラジエク **作喜劇]** 『Und das am Heiligabend (それを聖夜に)』 **撮]** ホルスト・E. ブラント **音]** ヘルムート・ニーア **美]** アルフレート・ヒルシュマイアー **衣]** ヴァルター・シュルツェ=ミッテンドルフ **編]** レーナ・ノイマン **制]** ハンス・マーリヒ **制社]** グループ「ローター・クライス」 **長]** 2589 m=95分、モノクロ、1961/62年制作 **封切]** 1962年10月7日、**場所]** ポツダム市パーベルスベルク、「タリーア」 **出]** エルヴィン・ゲショネック (ヴァルター・レルケ)、マティルデ・ダネガー (祖母)、カーリン・シュレーダー (アンネ・レルケ)、アルノー・ヴィツニエフスキ (トーマス・オスターマン)、ギュンター・ユングハンス (カール・レルケ)、ローゼマリー・シェーレンツ (ベギー)、ヘルヴァルト・グロッセ (オスターマン氏)、マリアンネ・ヴェンシャー、ヴァルター・ジュベ (クリンケンヘーファー夫妻)、カルラ・ルンケール (ジープコルン夫人)、ゲルト・エーラス、エーリク・フェルドレ、ユッタ・ヴァホヴィアク、フレート・デルマーレ、ジークフリート・キリアン他

ストーリー: 1961年のクリスマス。国营企業「8月13日」の労務部長ヴァルター・レルケは、祝日前に同僚たちへの挨拶で、家族とゆっくり過ごして欲しいと伝え、自分もそうしたいと思う。しかし、娘のアンネはサプライズとして、将来結婚して家族となるトーマス・オスターマンを連れて来る。レルケは、娘の恋人の出現に驚くと共に、彼女が妊娠を隠していたこと、更に、その相手トーマスが労働者と農民の国、東ドイツに批判的であることに激怒する。和やかなクリスマスは台無しになり、興奮の余り家を飛び出したレルケであるが、後に考え直す。若者たちを受け入れ、何故トーマスが国家に対して批判的になったのか、その原因を知りたい

と思う。レルケは二人の結婚に同意する。

解説: これは、当時チェコスロバキアで好評を博した舞台作品を映画化したものである。脚本家カントは、東ドイツによく見られる典型的なタイプを登場人物として描いた。基本にある楽観主義と、隠された扇動的な政治宣伝にも関わらず、デーファ映画には珍しく、それぞれの役柄に現実味が出ている。

批評: この映画の好評価は、近年優れた出版物で注目されている作家ヘルマン・カントに負うところが大きい。彼は、ブラジエク作品の舞台を東ドイツ社会に置き換えた。



『ああ、何と楽しい…』エルヴィン・ゲショネック

クリスマスに皮肉に描いた原作を活用したタイトル『ああ、何と楽しい…』で、登場人物やエピソードを増やし物語に幅を持たせ、我が国の諸問題を浮き彫りにする台本に纏め上げた。(1962年レナーテ・ホラント=モーリッツ、『Die Eule im Kino [I] [映画館のフクロウI]』所収)

この作品の最大の功績は、我が国の日常生活や諸問題に見られる滑稽さが、我々の視点で描かれていること。喜劇としての効果は、この国の労働スタイルの改善すべき点を上品に皮肉っている場面が少なからずあることだ。(1962年ハンス・ローマン、「ゾントーク 42」)

コメント: この作品の魅力は、同じストーリー展開と同じ人物構成で、25年後に再びギュンター・ライシュ監督が『WIE DIE ALTEN SUNGEN ... (この親にして…)』(1987)で扱っている。後者では全体に明るい雰囲気が増しているが、現実の社会主義に対する懐疑的心情は残ったままだ。

- この作品の脚本を書いたヘルマン・カントが、パーティ客の一人として出演している。

DIE ACHATMURMEL [メノウのビー玉]

→付録Aを参照

ACHILLESFERSE 『アキレスの踵』

監] ロルフ・ロザンスキー **脚]** ギュンター・メーネルト、グートルン・ドイベナー **撮]** ヘルムート・グレーヴァルト、**音]** グループ「エクスプレス」 **編曲]** ゲアハルト・ローゼンフェルト **美]** ディーター・アダム、**衣]** ヨアヒム・ディットリヒ、**編]** ウルズラ・ツヴァイク **制]** ヴェルナー・ランガー **制社]** グループ「ベルリン」 **長]** 2487 m=91分、カラー、brw、1978年制作 **封切]** 1978年12月7日 **場所]** ベルリン、「インターナショナル」 **出]** ハイトルン・ヴェルスコープ (ズザンネ)、エルヴィン・ベルナー (ミヒャエル)、ディーター・フランケ (トレーナーのリーガー)、イェシー・ラーマイク (ズザンネの母)、ユルゲン・ロイター (チーフトレーナー)、マンフレート・カルゲ (ズザンネの父)、アンネモネ・ハーゼ、ギュンター・グラッベルト (ミヒャエルの両親)、ゲリー・ヴォルフ、ベルコ・アッカー、レオン・ニェムチック、エツァルト・ハウスマン他

ストーリー: 17歳のズザンネは体操選手、国の代表チームに選ばれるチャンスがある。そんな矢先に練習で問題が出てくる。段違い平行棒で、新しいスタイルの着地が上手くいかない。また別の問題も発生。学校の成績が下がったが、優秀な娘が自慢の母親は決して理解しようとししない。離婚した父親は出張が多く、余りズザンネの力になれない。初恋の相手で恋人のミヒャエルは間もなく兵役で、練習に忙しいズザンネとデートの時間が無いと寂しく思っている。ただ一人トレーナーだけは、ズザンネの抱える悩みに理解を示す



『アキレスの踵』
ディーター・フランケとハイトルン・ヴェルスコープ



『アキレスの踵』ヴェルスコープとエルヴィン・ペルナー

味方だ。ズザンネは様々な問題を克服し、体操にも成果を上げる。

解説：スポーツ競技の世界で国際的成功を収めることは、東ドイツ国民の自信を高める。そのため、スポーツやスポーツ選手が、しばしば映画のテーマになってきた。しかし、それら因果性が何一つ疑問視されず、当作品も含め、常に平板で面白味の無い仕上がりになってしまう。

批評：制作者たちは、主人公の魅力はもちろん、観客も共感できる倫理的意図、例えば勇気、忍耐、リスク管理、責任感等を関連

付けようとするものだ。そこから、きめ細かく正確に生き生きと描かれたズザンネとトレーナーとの人間関係に価値が出てくる。ハイトルン・ヴェルスコープとディーター・フランケの素晴らしい演技のお陰である。(1979年 ギュンター・アクデ、「フィルムシュピーゲル 1」)

脚本家ギュンター・メーネルトと監督ロルフ・ロザンスキーは、これまでも何度か成長期の若者たちの悩みを題材に扱ってきたが、この最新作ほどステレオタイプな描き方をするのは珍しい。『アキレスの踵』は、バーベルスベルク撮影所の伝統的手法で「大衆を驚かせるような映像」のキャッチフレーズに沿った作品である。主演として発掘された新人ハイトルン・ヴェルスコープは堂々としているが、ファッション誌のモデルさながら展示住宅のようにモダンな家に住み、観客の興味をそそる体操競技のシーンもたっぷり、旅行ガイド的な映画になっている。(1978年 ハインツ・ケルステン、『So viele Träume [こんなに多くの夢]』より)

コメント：国際的に知られる体操選手エーリカ・ツッホルトが、チームリーダーの役で出演している。

-国家人民軍のシーンを批判し、フェルナー大将が文化大臣に手紙を送った。「… 良いのと悪いの、二つ知らせが来た」のように、大ざっぱで不作法なセリフに対する苦言である。ここで「悪い」という意味は、差し出した兵役への召集令のことで、「良い」は(頻繁に休暇を取っても)「将軍は理解がある」、「愛する部隊長」、「タイガ(北東ドイツ国境近くの勤務地エッグゲジーンのこと)」等。(『Kino ist mehr als Film [映画館は映像だけじゃない]』より)

ADDIO, PICCOLA MIA 『さようなら、私の可愛い人』

監] ロータル・ヴァルネケ **脚]** ヘルガ・シュッツ、クリステル・グレーフ **撮]** クラウス・ノイマン **音]** バッハ、モーツァルト、ゲアハルト・ローゼンフェルト **美]** アルフレート・ヒルシュマイアー **衣]** クリステア・ネ・ドルスト **編]** エーリカ・レームブール **制]** ヘルベルト・エーラー **制社]** グループ「ローター・クライス」 **長]** 3361 m=123分、カラー、brw **封切]** 1979年1月18日 **場所]** ベルリン、「インターナショナル」 **出]** ヒルマー・アイヒホルン(ゲオルク・ビューヒナー)、トルーデ・ベッヒマン(祖母ツォイナー)、リディア・ビリエ(おばジュール)、ウーテ・ルポシュ(ルイーゼ)、ホルスト・ドリнда(エルンスト・ビューヒナー博士)、ヴェルナー・ゴードマン(おじロイス)、イェルク・フォート(音楽教師)、ミヒャエル・グヴィスデク(ルートヴィヒ・ヴァイディヒ)、カーリン・グレゴレク(ヴァイディヒ夫人)、ラルス・ユング(ミニゲローデ)、クリスティーネ・ショルン(カロリーネ)、ハインツ=ディーター・クナウプ、ディートリヒ・ケルナー、ハンス=オットー・ラインチュ、アンティエ・ルーゲ、ヴォルフガング・アルンスト、ラルフ・ポルクヴァルト他

ストーリー：医学部の学生で作家のゲオルク・ビューヒナーは、1833年ストラスブールで恋人ルイーゼと別れ、ヘッセン州の故郷に帰る。そこで革命グループのリーダーで牧師のヴァイディヒと知り合う。二人は「人権協会」を組織、大衆を啓蒙し反政府運動への参加を呼びかけるため、雑誌『ヘッセン急使』を発行する。友人のミニゲローデとヴァイディヒが逮捕され、ビューヒナーも指名手配されるが、ルイーゼのいるストラスブールに亡命、『ダントンの死』を完成させる。更に身の危険を感じた彼は、ストラスブールからチューリヒに逃れる。『ヴォイツェック』を執筆しながら研究を続けるが、チフスを発病、1837年2月21日に23歳の若さで死亡。

解説：監督ロータル・ヴァルネケにとって、歴史上の人物を主題にした初めての作品である。ヴォルフ・ビアマンの市民権剥奪事件の後、東ドイツの多くの映像作家にとっては、歴史物に回避し、現代の問題を間接的に表現することが重要であった。

批評：この映画はビューヒナーや彼の同志を追求しているが、我々に疑問や要求を突き付けることは無く、逆に彼らを通して自分たちの経験や精神状態を確認するため、自己主張の資料や背景として利用する。全てが矛盾なく構成され、細部に亘って質が高い。しかし、全体としてプロセスより雰囲気重視、物事の関連性より各瞬間を詳しく描写することで、歴史的視点が妨げられている。「意欲的だ」という評価は何の慰めにもならない…。美しいシーンはあるが、静物画のようだ。「技巧を凝らす」という表現が頭から離れない。(1979年 ペーター・アーレンス、「ヴェルトビューネ 9」)



『さようなら、私の可愛い人』ビューヒナー役ヒルマー・アイヒホルン



アイヒホルンとミヒャエル・グヴィスデク(左)

この作品では、特に視覚を通して一種の諦めが感じられる。例えば、一面の雪景色の中に、国境を目指して必死に逃げる敗者ビューヒナーが小さな点のように見えるシーン。(…)何れにしても、この映画はロマン派絵画の影響と思われる非常に美しい映像(撮影クラウス・ノイマン)が強みである。(1979年3月18日ハインツ・ケルステン、「日刊シュピーゲル」)

コメント:大学の講堂のシーンでは、デーファ社の監督たちがエキストラとして出演している。中には、ヤーノシュ・ヴェイチ、ホルスト・E. ブラント、エルヴィン・シュトランカ、ヨー・ハスラー、脚本家ヘルガ・シュッツ、コンラート・ヴォルフ、ハイナー・カーロウ、ラルフ・キルステン、クルト・メーツィヒ、ギュンター・ライシュ、ロータル・ヴァルネケ、ジークフリート・キューン、ゴットフリート・コルディッツ、ウルリヒ・ヴァイス、ヘルマン・チョッヘ、クラウス・ドベルケ、ローラント・エーメ、コンラート・ペツォールトの顔が見える。

ÄRZTE 『医者たち』

監] ルッツ・ケーレルト **脚]** エーゴン・ギュンター、イルゼ・ランゴッシュ **撮]** ギュンター・アイジンガー **音]** ギュンター・ヘーリヒ **美]** アルフレート・ヒルシュマイアー **衣]** ヘルガ・シェルフ **編]** レーナ・ノイマン **制]** ハンス・マーリヒ **制社]** グループ「ローター・クライス」 **長]** 2580 m=95分、モノクロ、1960年制作 **封切]** 1962年2月1日 **場所]** ベルリン **出]** ヨハネス・アルペ(ヘーガー教授)、ギュンター・ジモン(ブレイム博士)、カルラ・ルンケル(ズザンナ)、ホルスト・シェーネマン(スカウトマン)、ハンス・ルッケ(ヒューブナー博士)、ホルスト・ドリンダ(ヴォルフガング)、ヘルガ・ピウア(ドーリス)、ギュンター・グラッベルト、ディタ・クルマン、ラインハルト・ミヒャルケ、ヴェルナー・ディッセル、アミー・フランク他

ストーリー: 東ドイツの工業都市にある病院。院長ヘーガーと若い主任医師ブレイムは長年の友人である。突然、ブレイムのところに西ドイツへの脱出を迫る匿名の脅迫状が届く。戦争中ヘーガーの息子がナチスへの協力を拒み射殺されたことに、彼も責任があるという内容だ。脅迫者の言う通り、ブレイムはヘーガーに対して事実を告白し、許しを請う。しかし、ヘーガーは立腹、話を聞こうともしない。ブレイムは西ドイツに逃れる。ヘーガーは自分の行動の間違いに気づき、心の葛藤を覚え、結局東ドイツを離れる。ミュンヘンで再会した二人は、互いに

話し合い解決の糸口を見つける。

解説: 医師が大量に国外脱出するという当時の東ドイツの緊急課題を果敢にテーマ化したものの、問題の根本原因を明らかにすることは出来ず、この映画の劇場公開は予定より1年遅れた。医学部インテリの立場を改善するという党中央委員会政治局の決議の後、映画によって医師団の気分を害することを避けた。その後ベルリンの壁が建設され、全てが無意味になった。

批評: 映画は、1961年8月13日より前に撮影された。その後でなく前に公開された



『医者たち』
ラインハルト・ミヒャルケ、ヘルガ・ピウア、ヨハネス・アルペ

方が良かった。というのも、この映画には警告という強いメッセージ性があり、古い知識層の対立や医師団を取り巻く環境について専門情報が目立つからだ。作家エーゴン・ギュンターは、西ドイツ社会からの脅迫による心理的影響に特化し、帝国主義的人身売買という手段で敵を抽象化することで満足している。彼らを冷酷で非人間的な悪者としてしか描いていない。(1962年2月3日フレート・ゼーガー、「ユング・ヴェルト」)

大分前に完成したこのデーファ作品を巡る論争は、残念ながら未だ終わっていない。このような映画制作は既に時代遅れになってしまった。議論を演出できると考え、テーゼを説明し尽くしたと満足し、現実の人間と感情を忘れてしまっていた。(…)致命的なのは、偏った台本と稚拙な映像化という二重の失敗である。硬直した不動のカメラは、室外に出ることが無く、退屈な議論と長い会話を撮り続け、それが映画のほぼ全体を埋め尽くす。ドラマ性、心を動かすような争い、ワクワクする映像表現を期待している観客は、がっかりだ。(1962年2月9日クリストフ・フンケ、「デア・モルゲン」)

コメント: 監督ルッツ・ケーレルトは、バーベルスベルク映画大学の教授に着任、一時期学長を務める。

ÄRZTINNEN 『女医たち』*

監] ホルスト・ゼーマン **脚]** ホルスト・ゼーマン、ペーター・ヴス **原]** ロルフ・ホーフート作同名戯曲 **撮]** オットー・ハーニッシュ **音]** ホルスト・ゼーマン **美]** ゲオルク・ウラツェ **衣]** インゲ・キストナー **編]** ベルベル・パウアースフェルト **制]** ドロテア・ヒルデブランド **制社]** グループ「バーベルスベルク」 **長]** 2800 m=103分、カラー、brw、1983年制作 **封切]** 1984年1月19日 **場所]** ベルリン、「コスモス」 **出]** ユディ・ヴィンター(カティア・ミヒェルスベルク博士)、インゲ・ケラー(リディア・コヴァレンコ博士)、ヴァルター・ライヤー(リーメンシルト博士)、ロルフ・ホッペ(ベプリンガー博士)、ダニエル・ヤコブ(トーマス・ミヒェルスベルク)、ミヒャエル・グヴィスデク(ミヒェルスベルク博士)、ケーテ・ライヒェル(ブラウナー博士)、ヴォルフガング・デーラー(クーノ)、ホルスト・シュルツェ(上席検事)、エレン・シュヴィアース(女医)、クリストフ・エンゲル、ハルトムート・ブルス、バルバラ・ディットウス、レオン・ニェムチック、ジョン・ハリソン他

ストーリー: 女医のリディア・コヴァレンコは、製薬会社の仕事を失う。死亡例のある自社製薬品の欠点を隠ぺいすることを拒んだのが理由だ。間もなく知り合いの紹介で新しい職場を見つける。しかし、企業統合の結果、以前の上司が再び彼女の会社にやって来る。彼女は徐々に順応する。娘のカティアも女医だが、キャリア志向が強く、他人に構わず出世を目指している。そして不必要な手術を研究目的のために行い、患者を死なせてしまう。カティアの息子トーマスも医者を目指し、病理学の助手をしている。彼はこの事件が闇に消され、院長によって裁判が阻止されたのを知る。交通事故に遭い病院に運ばれたトーマスは、家族に看取られて死亡する。負傷が原因か人工輸血が原因か、死因は不明のままだ。

解説: 東ドイツは文化政策を通して、西ドイツの劇作家ロルフ・ホーフートと長年良い関係にあった。彼の作品のほとんどが、ロストック市の国民劇場を中心に、東ドイツで上演されテレビ中継された。西ドイツで定着していた映画のテーマが、デーファ社の作品に採用されることは余り無かったが、この『女医たち』は登場人物が個性的でスターの起用に適している。正式な



共同制作ではないが、西ベルリンのドルニオク・プロダクション、スウェーデンのテレビ局、スイスのモノポール映画が協力している。**批評**：やるせない映画だ。しかし非常に重要な作品である。ホーホフトが非難しているのは、もちろん西側の社会だ。この教訓的ドラマが東ドイツの我々に与えるのは、単なる情報以外に何も無い。同じように深刻な、同じように必死に議論しなければならない問題は、我々の国には無いのだろうか？不安な気持ちになる。(1984年 S. ホリッツァー一、「教会 13」)



人生とは、こういうものだ。ロルフ・ホーホフトが考え、デーファ社が映画化した。西の作家と東の制作会社が合同で高価な映画を世に出した。東ドイツの少女たちが思い描くキラキラした西の世界を、華やかなカラー作品に仕上げている。雰囲気はアメリカのTVドラマ『ダラス』そのもの、予算に糸目を付けず、セックスと犯罪もたっぷり。ほんの2~3か月の間に100万人以上の東ドイツ市民が映画館に足を運んだと聞いても何の不思議も無い。(1984年 ハンス・ハルター、「デア・シュピーゲル 22」)

コメント：東ドイツ映画批評家賞が、この作品及び主演のインゲ・ケラーとユディ・ヴァンターに与えられた。

- 短いシーンにしか出ていない女優エレン・シュヴィールスの息子で、将来を期待されていた若手俳優ダニエル・ヤコブは、この映画の役に似た数奇な運命に見舞われる。撮影が終わって数か月後、不治の病に倒れ死亡。

- ホルスト・ゼーマン監督は、医師たちの国際会議のシーンで、家族と共に出演している。

AFFAIRE BLUM 『罭 ブルーム事件』*

【監】 エーリヒ・エンゲル、【脚】 ローベルト・A. シュテムレ 【撮】 フリートル・ベーン=グルント、カール・プリンツナー 【音】 ヘルベルト・トラントウ 【美】 エミール・ハスラー 【衣】 プリギッテ・ゲッティング 【編】 リリアン・ゼンク、【制】 ヘルベルト・ウーリヒ 【制社】 グループ「ヘルベルト・ウーリヒ制作」 【長】 3009 m = 110分、モノクロ 封切】 1948年12月3日 【場所】 ベルリン、「バビロン」 【出】 ハンス・クリスティアン・ブレッヒ (カールハインツ・ガブラー)、ギーゼラ・トロウヴェ (クリスティーナ・ブルマン)、アルノー・パウルゼン (ヴィルヘルム・プラッツァー)、マリー・デルシャフト (アンナ・プラッツァー)、ブランディーネ・エービングガー (ルツィ・シュメアシュナイダー)、クルト・エアハルト (ヤコブ・ブルーム博士)、アルフレート・シースケ (警部オットー・ボンテ)、パウル・ビルト (コンラート)、エルンスト・ヴァルドウ (シュヴェルトフェーガー)、カーリン・エヴァンス (ザビーネ・ブルーム)、ヘルベルト・ヒューブナー、ゲアハルト・ビーネルト、マルガレーテ・シェーン、ヴェルナー・ペーターズ、ラインハルト・コルデホフ他

ストーリー：ワイマール共和国時代にマクデブルクで実際に起こった事件。ユダヤ人の工場主ヤコブ・ブルームは、詐欺師ガブラーの供述により、使用人の簿記係を殺害した罪で逮捕される。反ユダヤ主義者の裁判官には、単純な事件である。犯人はユダヤ人しかいない。ブルームの無罪を示す証拠も、ガブラー自身の犯罪を裏付ける手掛かりも、判事の考えを覆すことは無かった。最後の決定的な瞬間、ブルームの友人がベルリンから呼んだボンテ警部が、真犯人ガブラーと彼に協力した恋人の有罪を立証する。司法当局には、このスキャンダルを黙殺する他に、なす術は無かった。

解説：ナチス政権が終わりを遂げた第二次大戦後間もなく、ファシズムを可能にした精神的土壌について描いたこの作品は、きめ細かい演出と出演者たちの見事な演技のお陰で大成功し、デーファ映画の古典的名作となった。

批評：この映画では、どんな短いシーンもセリフの一言も全体を構成する部分であり、無駄な実験も無ければ、間違ったキャスティングもない。例えば、裁判官たちが突然カリカチュア的に見えても、演技がグロテスクになることはない。カリカチュアのような裁判官は実際に存在したし、また現在もそういう役人があることを思うと身震いがする。「ボンのプロシャ貴族」のような裁判官を同時に一人の人間として描くことは出来るのか？ (1948年 レオ・メンター、「ヴェルトビューネ 59」)

監督エンゲルは、噂どおりの「驚くべき冷静さ」で、人間の滑稽さを発見する秘かな喜びと辛らつさを誇張する楽しみを結び付けた。しかし同時に、『罭 ブルーム事件』の登場人物のような人間が、何十年に亘って政治風刺の「Simplicissimus (ジンプリチシムス)」誌上のみな



らず、法廷も賑わしてきたことに、疑いの念を抱かせない。更に、正義は勝つというハッピーエンドが唯一この事件では可能であったが、一般にドイツでの裁判には当てはまらないということもはっきりと観客に示す。不安が残る。(1994年 クリステアアーネ・ミュッケンベルガー、『Das zweite Leben der Filmstadt Babelsberg [映画都市バーベルスベルクの第二の生]』所収)

コメント: ハンス=クリスティアン・ブレッヒは、この犯罪サスペンス映画を出発点に俳優としてのキャリアを積む。最後にデーファ作品に出演したのは、デーファ社が幕を閉じる直前、ハイナー・カーロウ監督のテレビ映画『*BEGRÄBNIS EINER GRÄFIN* (伯爵夫人の埋葬式)』(1992)である。

関連の出版: R. A. シュテムレ著『Affaire blum (ブルーム事件)』、1948 ベルリン、ドイツ映画出版

ALARM IM ZIRKUS 『サーカスでの警報』*



『サーカスでの警報』
ハンス・ヴィンターとエルンスト=ゲオルク・シュヴィル



エルヴィン・ゲショネックとカール・ケンツィア

監] ゲアハルト・クライン **脚]** ヴォルフガング・コールハーゼ、ハンス・クービッシュ、ヴァルター・シュミット **撮]** ヴェルナー・ベルクマン **音]** ギュンター・クリュック **美]** ヴィリー・シラー **衣]** ヘルガ・シェルフ **編]** ウルズラ・カールバウム **制]** パウル・ラマッハー **長]** 2276 m=83分、モノクロ **封切]** 1954年8月27日 **場所]** ベルリン、「バビロン」 **出]** エルヴィン・ゲショネック (クロット)、ウーヴェ=イェンス・パーベ (ジミー)、カール・ケンツィア (バッタ)、ウルリヒ・タイン (ヘルベルト)、ハンス・ヴィンター (クラウス)、エルンスト=ゲオルク・シュヴィル (マックス)、アンネリーゼ・マッシュラート (ヴァイゲル夫人)、ジークフリート・ヴァイス (ヘップフィールド)、J.ペーター・ドルンザイフ (人民警察警部)、ギュンター・ハーク (キャッチャー)、マルガ・レガール、エーリヒ・フランツ、パウル・プフィクスト、ヘルマン・ヴァーゲマン、フリッツ・デヒョー他

ストーリー: 西ベルリンに住む少年クラウスとマックスの家庭は、決して裕福ではない。二人の夢はボクシングの選手になることで、練習用のグローブを買うために一所懸命貯金している。しかし、未だ充分ではない。そんな時、飲み屋の主人クロットから、いかがわしい商売を手伝わないかと声をかけられる。クラウスは、東ベルリンで友達がいるサーカ

ス「バーレイ」の馬を盗む計画にクロットが関係していることを、偶然耳にする。憤慨したクラウスは、窃盗事件が起こらないよう、危険を冒して阻止しようとする。

解説: この少年向けミステリーは、プロパガンダ的意図を前面に出している訳ではないが、冷戦に対する主張は明らかで、社会性の強い映画である。1953年に実際に起こった事件がベースとなっている。実際の事件現場でロケし、素人が上手に演技をしている信憑性の高い作品で、イタリアのネオレアリズモの影響がはっきり見てとれる。これはゲアハルト・クラインとヴォルフガング・コールハーゼによる、いわゆる「ベルリン映画」の第1回作品で、イデオロギー的にも映像美学的にも、常に話題を呼んでいる。

批評: クラインとベルクマンは、人工的な照明効果を嫌い、通常の劇映画用より高感度で柔らかい色調のニュース映画用フィルムを使って撮影した。ルポルタージュ性の強い映像は、この脚本と演出にぴったりだ。映画全編どのシーンをとっても、決して舞台作品には無いものだと、ゲアハルト・クラインは自信を持って言えるだろう。また、理論派の映画評論家たちの意見に反して、物語の情緒性は決して失われていない。(1954年 ロータル・クロイツ、「ヴェルトビューネ 36」)

この映画で重要な役を演じているのは、わが国の人民警察である。国民と人民警察の間には、密接で強い信頼関係が築かれている。とりわけ映画の決定的瞬間に警官たちが登場すると、いつも大きな拍手喝采が起こる。(1954年9月3日 H. K.、「新しいドイツ」)

確かに『サーカスでの警報』は、現代社会の傷に触れる『*BERLIN - ECKE SCHÖNHAUSER* (ベルリン シェーンハウザーの街角)』(1957)程のインパクトは無いが、この作品は、最初のモデルとして自然で新鮮な魅力がある。泉が湧いて発酵するように、これまでにない新しい映像手



『サーカスでの警報』『バーレイ』サーカス団の飼育係たちとハンス・ヴィンター (右端)

法が、あちこちで輝きを放つ。映像で語る楽しさ、映画史にしっかりと足跡を刻む作品である。(1984年シュテファン・ゼーネフェルト、「ゾントーク 30」)

ほとんどのデーファ映画が、ストーリー性を犠牲にし、社会主義的メッセージを発信していた時期がある。クラインとコールハーゼはストーリーを最優先にしているが、そのためにこの作品が非政治的だとは言えない。この映画では、資本主義体制での社会的弱者が仕事のチャンスに恵まれず、如何に犯罪に手を染めるかというところに力点が置かれている。しかし、主題がストーリーに影響を与えることは無く、むしろ陽の当たらない人物を描くモチベーションになっている。(…)『サーカスでの警報』は、デーファ社が求める現実的な作品であるが、社会主義的リアリズムにありがちな誇張は見られない。様式的には、イタリアのネオリアリズムに近く、公開時この作品は当局を困惑させ、その状況が1965年辺りまで続いたが、同年第11回総会で、このデーファ独自のスタイルに終止符が打たれた(あるいは、この様式がイタリア時代以前に終わっていたというのが正しいだろう)。映画制作については、実際に起こった事件に負うところが大きいと思われる。(2015年6月7日 ジム・モートン、「東ドイツ映画ブログ」)

コメント: クラウス役とマックス役の出演者を選ぶため、クライン監督は800名の若者を審査した。マックス役に決まったエルンスト=ゲオルク・シュヴィルは当時14歳、この作品で俳優としての道を歩み始め、今日まで活躍を続けている。

関連の出版: W. コールハーゼ / H. クービッシュ共著『サーカスでの警報』、サスペンス映画の文学的脚本、1954 ベルリン、ヘンシェル出版

ALASKAFÜCHSE 『アラスカきつね』

監] ヴェルナー・W. ヴァルロート **脚]** エーゴン・ギュンター、ゲアハルト・ハルトヴィヒ **原]** ヴォルフガング・シュライヤー作 同名物語 **撮]** オットー・メルツ、**音]** カール=エルンスト・ザッセ **美]** パウル・レーマン **衣]** ギュンター・シュミット **編]** ヘルガ・エムリヒ **制]** ハンス・マーリヒ **制社]** グループ「ローター・クライス」 **長]** 2875 m = 105分、モノクロ、Tovi、1964年制作 **封切]** 1964年8月7日「夏休み映画週間」 **場所]** エアフルト、国際園芸博覧会「iga 野外劇場」 **出]** フリーデリケ・シュトゥルム (ブレンダ・リード)、トーマス・ヴァイスゲルバー (ジム・レスリー)、ハンス=ベーター・ミネッティ (ボブ・ハリス)、ゲアハルト・ラッホルト (ヘスター)、ヴォルフ・カイザー (リード大佐)、イヴァン・マルレ (ゴードン・グレイ)、ハンス=ヨアヒム・プロホヴィッツ (パトリック)、ヨッヘン・ディーステルマン (ブライアン)、アルミン・ミュラー=シュタール (ソ連人医師)、ハンス・トイシャー、カール=ハインツ・オッペル、ハンス=ローベルト・ヴィレ他

ストーリー: ジム・レスリー機長はアメリカ空軍のパイロットで、ソ連国境に近い辺鄙なアラスカ基地に転属となる。そこで旧友ハリスに再会、指揮官の娘ブレンダに恋をする。やがて、彼女の婚約者ゴードン・グレイ議員と対立。その後レスリーは、グレイの画策により、ハリス、航空士ヘスターと共に危険な任務を命じられる。悪天候の中、ソ連軍潜水艦の方向探知のために配備されているブイを点検しなければならない。流水上に緊急着陸した際、ハリスが重傷を負う。ソ連軍の監視領域内で無線は使用禁止であったが、ジムは、それを無視し非常信号を送る。ソ連の潜水艦が救助に現れ、ハリスは手術を受ける。ソ連軍の協力の下、壊れた軍機は復旧し離陸可能になる。基地に戻ったジムは逮捕され、ブレンダは彼から離れていく。

解説: ヴォルフガング・シュライヤーの書いた冒険小説をエーゴン・ギュンターが脚本にし、それをヴェルナー・W. ヴァルロート監督が映画化。シュライヤーが冷戦時代の対立を題材として書いた小説は、しばしば東ドイツのテレビでもドラマ化されている。

批評: ストーリーとしては(…)二つの可能性があった。(…)一つは、特定の階級層が未だに関わっている冷戦の現状についてサスペンス風のスリラーとして暴露する方法。あるいは、登場人物の性格を綿密に描き、対立関係を深く追求する方法である。完成した映画はスピード感に欠け、ステレオタイプな登場人物と議論が多いだけで、セリフも「男っぽく」あつらえた中身の無いものだ。(1964年8月4日 emjot、「ベルリン新聞」)

脚本を書いたエーゴン・ギュンターは、主人公たちに大仰なヘミングウェイ調の長いセリフをしゃべらせ、監督ヴェルナー・W. ヴァルロートはピカピカに磨いた象徴的映像表現を試みた。しかし、ストーリーは首尾一貫せず、緊張感に乏しい。(1964年7月31日 H. U.、「ノイエ・ツァイト」)

コメント: 監督ヴェルナー・W. ヴァルロート自身がソ連兵の役で出演している。

- タトラ高原の積雪が少なくロケが中止された後、フィンランド湾で撮影が続行された。

- この作品で映画デビューを果たした女優フリーデリケ・アウストは、当時はフリーデリケ・シュトゥルムという名前で主演している。

ALEKSANDR MALENKIJ

→ **ALEXANDER DER KLEINE** 『小さなアレクサンダー』を参照

ALEXANDER DER KLEINE 『小さなアレクサンダー』

東独/ソ連合作、児童映画 **監]** ヴラジーミル・フォーキン **脚]** インゲブルク・クレッチュマー、ヴァレンティン・エジョフ、ヴラジーミル・エジョフ、ヴラジーミル・フォーキン、ゲートルン・ドイベナー、A. イヴァーノフ **撮]** セルゲイ・フィリポフ **音]** エドゥアルド・アルテミエフ **美]** エーリヒ・クリュルケ **衣]**





『小さなアレクサンダー』
ボリス・トカレフとウーテ・ルボシュ



主役トルステン・ナレツパ

ギュンター・シュミット 編】T.ベリヤーエヴァ
制】アルカジ・クシュリアンスキ、ディートマー・
リヒター 制社】グループ「ベルリン」長】2682
m=98分、カラー、1981/82年制作 封切】1982
年10月29日(東独) 場所】ベルリン、「コスモ
ス」 共制】モスクワ「ゴリキー映画スタジオ」、
ロシア 露語題】ALEKSANDR MALENKU 出】ト
ルステン・ナレツパ(小さなアレクサンダー)、ボリ
ス・トカレフ(大尉ツヴェトフ)、ユーリー・ナザロ
フ(准尉クリスチヤノヴィッチ)、ミハイル・コクシ
ェノフ(兵士クリイキン)、オーラフ・シュナイダー
(ピンゼル)、ウーテ・ルボシュ(テッサ)、ゲリー・
ヴォルフ(ヒューブナー)、ヴァルフリーデ・シュミット(フリーデル)、ゲルト・
ミハエル・ヘンネベルク、ハーラルト・ヴァルムブルン、ハイデ・キップ、フ
ランク・シェンク、ハンス=ウーヴェ・パウアー他

ストーリー: 1945年。ナチス国防軍が敗れ、戦争は終わる。大戦前
レニングラードでドイツ語講師をしていたツヴェトフ大尉には、新
しい任務が待っている。「毎日ルントシャウ」新聞社への配属である。
異動先へ行く途中、小さな村に立ち寄った際、臨時に設置された孤
児院で協力を求められる。そこは人で溢れ、何もかもが不足している。
ソ連兵たちは、出来る限りの手助けをし、薬品、毛布、靴を調達する。
子供たちの中には、ファシズム思想を信奉する扇動者もいた。そんな
彼らも、脱走兵一味に襲われ、ソ連兵や子供が犠牲になった後、よう
やく自分たちの行動について反省し始める。

解説: ジャーナリストのインゲブルク・クレッチュマーは、ソ連
占領軍本部の新聞「毎日ルントシャウ」に配属された初めてのドイツ
人編集者であった。彼女の記憶を元に脚色された構成であるが一貫性

に欠け、子供を対象に作られた映画であるにも関わらず、暴力シーンが含まれているため、観
客は14歳以上と制限がついた。

批評: 包括的に描くという制作者側の努力は、主に美術造形的な部分にあった。そのため、纏
まった構成の映像芸術と言うより、全体として寄せ集めの文芸欄記事のようになった。不統一感
は、俳優たちの演技にも出ている。真実味があり感情移入の出来るシーンも見られるが、深みの無い空
虚で無味乾燥な演技が混在する。(1982年 ギュンター・アクデ、「フィルムシュピーゲル23」)

この映画の厄介な問題は歴史評価だ。耐え難い程の善悪二元論に陥っている。例えば、共産
主義者で強制収容所に拘留されていた過去を持つ村長は唯一好ましい人物だが、他の登場人
物は資本主義の大農家からナチのパルチザン部隊員に至るまで、全て否定的に描かれている。
(…それとは対照的に、ソ連軍所属の軍人たちは皆、品行方正で非の打ちどころが無い。彼
らは、自国に侵攻した敵国の人々に対してでさえ善意と理解を示し、協力的である。(1996年
『Zwischen Marx und Muck [マルクスとムックの間に]』)

コメント: この映画はミンスク国際映画祭で若手監督賞グランプリを受賞。

ALFONS ZITTERBACKE 『アルフォンス・ツイターバッケ』

児童映画 監】コンラート・ベツォールト 脚】ヨアヒム・デューリング、コンラート・ベツォールト、ヴェ
ルナー・ベック 原】ゲアハルト・ホルツ=パウメルト作『Alfons Zitterbacke, die heitere Geschichte eines
Pechvogels (アルフォンス・ツイターバッケ 不運なやつ面白い話)』 撮】エーベルハルト・ボルクマン
音】ゲアハルト・ローゼンフェルト 美】エーリヒ・クリュルケ、ヴェルナー・ピーシュケ 衣】ゲアハ
ルト・カダツ 編】テア・リヒター 制】ベルンハルト・ゲルベ 制社】グループ「ベルリン」長】1843 m
=68分、カラー 封切】1966年2月25日 出】ヘルムート・ロスマン(アルフォンス)、クラウディア・メ
ーゲンブルク(ミッキィ)、ギュンター・ジモン(父ツイターバッケ)、アンゲラ・ブルナー(母ツイターバ
ッケ)、ヘルゲ・フォルブレヒト(メックスヒェン)、ウーヴェ・ピーチュ(ペーター)、エーリク・S.クライン、
エーファマリア・バート(アルフレートと妻)、ホルスト・ヨーニシュカン(教師ギーアツィヒ)、ヴェルナー・
リールク、ハンス=エトガー・シュテッヒャー、ヴェルナー・カメニク、エルゼ・ヴォルツ、ペアーテ・ハンスパ
ッハ、マリアンネ・エフェザー他

ストーリー: アルフォンスは利発で想像力豊か、将来を夢見る少年で、毎日いろいろな問題を解
決するために大忙しである。仲間たちから名前
のせいでからかわれ、父親からは筋力が無いと
小言を言われている。父親は、息子が「本物の
男」になることを願っている。一方で息子の方
は、忠実なガールフレンド、ミッキィの支えが
あり一所懸命に努力している。しかし、静かな
場所に一人でいると、大勢のファンに囲まれる
スポーツ選手か、宇宙を探検する飛行士になっ
た自分自身を思い描く。

解説: 10歳のアルフォンス・ツイターバ
ッケが主役の児童書3冊は、東ドイツの同
年代の読者に大人気。映画化のために、それ
ぞれのエピソードを組み合わせ、登場人物を
新しく考え出した。完成後、コンラート・ペ
ツォールト監督は、国家指導部の指示でシー
ンを幾つか削除しなければならなかった。抗
議のために、監督は自分の名前を冒頭のクレ
ジットから外させた。

記録: コンセプト上の観点から、ツイター
バッケ役の描き方、編集の仕方、また必要に
応じてストーリー展開を変更した。また、そ
ののための映像美的な解決策として解説を加
えた。つまり、特に物語が交錯するシーンで、
アルフォンス・ツイターバッケの声でナレー
ションを挿入した。映像を短縮し、何シーン



『アルフォンス・ツイターバッケ』
アルフォンス役ヘルムート・ロスマン



ロスマンと父親役ギュンター・ジモン

かをカットして生じた問題も、このような形で解消することが出来た。全体の長さは1900mを超えてはならない。既に確定しているのは、400mから500m短縮することだ。(1965年12月30日 撮影所責任者と監督との会話記録、『Verbotene Utopie [禁じられたユートピア]』所収)

批評：もちろん、ここで起こる災難や悪ふざけに、どれほど教育的意味があるのか疑わしい(両親が笑いものにされているだけではないのか)。(1966年6月2日「ベルリン新聞」)子供たちの多くがツイターバッケ小説を読んでいるという前提である。当然、再び映画でも楽しめよう。しかし、新鮮な面白さという点では不充分、映画の課題である。(1966年3月6日 カール=ハインツ・メルティンス、「中部ドイツ最新ニュース」)

『アルフォンス・ツイターバッケ』の場合も、映画よりゲアハルト・ホルツ=パウメルトの小説の方が魅力的だ。私の息子も「本の方が、ずっとずっと面白い。」と言っている。(…)一つ確かなのは、コンラート・ベツォルト監督が子供たちを演出する力があるということだ。そして、アルフォンスが生活する場所や育つ環境を選ぶ監督のセンスは、称賛に値する。何よりも、朗らかで楽観的な明るさと清潔感に溢れている。(1966年3月20日 ヨアヒム・ライホウ、「新しいドイツ」)

コメント：屋外撮影のほとんどは、間もなく大学の新しいキャンパスを建てる予定になっていたイエーナの旧市街で行われた。

- アルフォンスが3mの高さの塔から飛び降りるシーンは、スタントマンとしてファルク・ロスマンが代役をしたが、彼は1980年オリンピックの飛込み種目で金メダルを獲得。
- アルフォンス役のヘルムート・ロスマンは大学で物理学を専攻、後に研究者となる。また、パートナー役のクラウディア・メーゲンブルク(原作に無い「ミッキィ」は、脚本家たちの発案)は本業が音楽専門の教育者で、一時期ヘルムート・ロスマンの息子を担当したこともある。
- ヘルムート・ロスマンの出演料は1日30マルクであったが、60日間の撮影でもらったギャラを使い、有名なダイヤモンド社製3段変速ギア付きのスポーツバイクを買った。
- 1986年、同じ題材を基にアンドレアス・シュライバー(1950生まれ)が、東ドイツテレビ製作の6部作シリーズを演出した。
- 脚本家で監督のマルク・シュリヒター(1962生まれ)は、2015年にこの映画のリメイクのための脚本奨励助成金を取得。

ALLE MEINE MÄDCHEN 『みんな僕の彼女』

監] イーリス・グスナー **脚]** ガブリエレ・コッテ、タマラ・トランペ **撮]** ギュンター・ハウボルト **音]** バルドゥル・ベーム、グループ「オリオン」 **美]** ディーター・アダム **衣]** インゲ・キストナー **編]** レナーテ・バーデ **制]** ウーヴェ・クリメク **制社]** グループ「ベルリン」 **長]** 2355m=86分、カラー、brw、**仮題]** *Bewährungsprobe* (試練) 1979年制作 封切) 1980年4月24日 **場所]** カール=マルクス=シュタット、「シュタットハレ」 **出]** アンジェイ・ピエチンスキー(ラルフ・ペシュケ)、リッシー・テンペルホーフ(職長)、モニカ・ビーレンシュタイン(エラ)、マドレーヌ・リールク(ズージ)、バルバラ・シュニツラー(アニタ)、ヴィオラ・シュヴァイツァー(ケルスティン)、クラウス・ピオンテク(ラインホルト)、ヴォルフガング・デーラー(ラウターバッハ)、フリッツ・マルクヴァルト(バッハニン)、ハイデ・キップ(ヴィッカー夫人)、エフェリン・シュプリット、ジェッキィ・シュヴァルツ、カルメン=マーヤ・アントーニ、ゲルトラウト・クライシヒ、ローラント・クーヘンブーフ他

ストーリー：映画大学の演出コースで学ぶラルフ・ペシュケは、ベルリンのランプメーカー、ナーバ社の女性作業班について映画を撮りたいと思う。有能な職長ボルツィンの下で働く若い女性5人のチームは非常に優秀であるが、外部からは見えない問題や緊張関係があることに、次第に気付いていく。特にケルスティンには皆が気を遣っている。ギムナジウム卒業前の彼女には窃盗の前科があり、執行猶予期間中で班に加わった。また、職長がチーム各メンバーの規律違反について記録しているのを女性たちが知り、激しい口論になる。その結果、職長は神経衰弱になり入院。更に、作業班で現金が無くなったことでケルスティンが疑われ、彼女も作業班から去っていく。チームの女性たちと仲良くなり、ケルスティンを好ましく思っているラルフも、彼女に疑いの目を向け始める。

解説：1本の「産業映画」が、生産過程や社会経済について以上に、そこで働く人々を具体的に描くことが出来ると、この作品は証明した。そして、この種の映画に対する皮肉も忘れていない。劇中、未だ若い学生監督が、この制作について語っている。「どういう結果になるか、もちろん分かっている。僕らが一所懸命に作っても、見たいと思う人なんか居ない。チャンネルを他に替えるだけだ」。

批評：この映画の魅力、芸術的統一性は、何よりもイーリス・グスナーの演出とギュンター・ハウボルトの撮影との絶妙な協同作業の賜物だ。企業内環境と雰囲気との整合性が、映像を通して伝わってくる。これら全ての要素が軽妙な演出の前提条件であり、このジャンルの良い例となるだろう。(1980年 マルギット・フォス、「映画とテレビ7」)

恐らく我々の西ドイツでは、イーリス・グスナーという女性監督が女性の立場で描いた「女性映画」(ただし、フェミニズム映画ではない)と呼ばれるであろう。(…)監督は、最近のバーベルスベルクで制作された映画と同様、人間関係における違和感について問題提起し、相互理解と寛容、自己認識と自己実現、また集団における個人主義を擁護している。(1980年6月9日 ハインツ・ケルステン、「フランクフルター・レントシャウ」)

記憶：テーマをより深め、広げるために新しいシーンを幾つか加筆した。例えば、同僚に聞かれた映画大学の女性教員が、夜自宅で独り酒を飲むことを話すシーン、つまり孤独というテーマ。それからベッドシーン、最後のシーン等も新しく書き足した。ある朝、子供番組で「みんな私のカモちゃん、湖で泳いでいる …」という童謡を聞いて、ようやく映画のタイトル『みんな僕の彼女』を思い付いた。(…)この映画では俳優たちの演技が見事だったので、何人



か外国の映画仲間、例えば有名なロシア人監督アレクサンドル・ミッタは「出演者は皆、俳優じゃない。偶然『見つけた』非常に優秀な労働者だ」と言ってくれた。(2012年 イーリス・グスナーがヒルトルト・シュルツに語る、「デアファ映画ライブラリー」)

コメント: この『みんな僕の彼女』は、1980年4月カール=マルクス=シュタットで初めて開催された「第1回東ドイツ国民劇映画祭」のオープニングを飾った。作品は観客審査賞を、出演のリッシー・テンペルホーフとフリッツ・マルクヴァルトは演技賞を受賞した。

DIE ALLEINSEGLERIN 『女ひとりのヨット乗り』

監] ヘルマン・チョッヘ **脚]** レギーネ・ジルヴェスター、クリステル・グレーフ **原]** クリスティーネ・ヴォルター作同名小説 **撮]** ギュンター・ヨイテ **音]** ギュンター・フィッシャー **美]** パウル・レーマン **衣]** ヘルムート・ポック **編]** モニカ・シンドラー **制]** ゲリット・リスト **制社]** グループ「ローター・クライス」 **長]** 2464m=90分、カラー、brw、1986年制作 **封切]** 1987年7月2日 **場所]** ベルリン、「インターナショナル」 **出]** クリスティーナ・ポヴィライト (クリスティーネ)、ヨハンナ・シャル (ヴェローニカ)、マンフレート・ゴル (ヴェルナー)、ゲッツ・シューベルト (ゲオルク)、モニカ・レンナルツ (父のパートナー)、グンター・ショース (教授)、アヒム・ヴォルフ (クラウス・ローマン)、マティス・シュラーダー (クッテ)、フレート・デルマーレ (クレトケ)、クリスタ・レーザー (ゲブフェルト夫人)、ブルーノ・カルステン (クリスティーネの父)、ルッツ・リーマン、バルバラ・ディットウス、ヴィリ・シュラーデ、マルティン・トレッタウ、フリッツ・デヒョー他

ストーリー: 若いクリスティーネは、長い間音信不通だった父親から一隻のヨットを相続する。彼女は離婚して息子が一人、貯金は無く、研究所の仕事で毎日忙しい。ヨットの操縦もしたことがない。売却したいと思うが、安く手放す気はない。結局、冬の間は売らず、春になって高値が付くまで磨き上げることにする。それには、時間も労力も予想以上に必要だ。毎週末必死に手入れし、息子の世話はそっこのけ。恋人と別れ、研究にも失敗する。そんな彼女を理解してくれる人は無く、仕事仲間のクッテが時々手伝ってくれるだけ。ようやくヨットが完璧な状態に仕上がったので、高く売れるだろう。しかし、彼女は手元に置いておきたいと思う。そして、たった一人でヨットに乗る。

解説: この作品で、ヘルマン・チョッヘ監督は女性をきめ細やかに描く強みを見せている。現代社会に対する批判は、皮肉や簡素な描写によって間接的に行っている。

批評: 映画のテーマはパートナー間の様々な問題であるが、それは実際の作品自体にも反映されている。クリスティーネ、つまり一人でヨットに乗る主人公は、ドラマという海に一人ぼっちで話し相手は余り居ない。また、ストーリー上の架空のヨットが航行する海に吹く風のような刺激も無い。会話が必要になると、常に話が途切れる。(1987年 ヘンリック・ゴルトベルク、「フィルムシュピーゲル 17」)

女性の自分自身に対する皮肉が新鮮に響き、研究所の風刺的な描写とともに映画に明るさを与え、シーンの簡潔さも相まって好感が持てる。もう少し感情を押えれば、クリスティーナ・ポヴィライトの仲間タマラ・ダンツがグループ「シリー」と一緒に歌うような、多くの名も無い女性たちへの賛歌になるだろう。もちろん、この映画は「子供を養うシングルマザー」インテリ版とも言えるものだが。(1987年7月3日 ハインツ・ケルステン、「リアス・ベルリン」)

この映画の結末はオープン、途中で投げかけられた疑問の全てが解決した訳ではない。(1987年7月9日 クラウス・M. フィードラー、「農民エコ」)

チョッヘは鋭い感性に恵まれた東ドイツの監督の一人だ。特に、十代の若者が抱く疎外感を絶妙な呼吸で表現する。この映画の主人公は成長した大人だが、疎外感を払拭できないでいる。チョッヘは、この作品を主にクリスティーネの視点から描いているが、他の人物の視点も決して無視しない。また、フェミニストの主張を強く打ち出しながらも、男たちがステレオタイプの粗野な存在に仕立てられていない。彼らが彼女の下を去る時に初めてその理由が分かる。彼女一人が他のヨット所有者たち(全員男性)の仲間に入れてもらえない。そのとき観客は彼女の孤独を理解する。(2015年8月1日 ジム・モートン、「東ドイツ映画ブログ」)

コメント: これは東ドイツ出身で長年外国に在住する女性作家が書いた小説を映画化したものである。

-主演のクリスティーナ・ポヴィライトは、女性ロックバンド「モナ・リゼ」のドラム奏者であった。この作品で女優としての才能を見せたにも関わらず、再びスクリーン上に戻ることは無かった。

-デアファ社のスチール写真のカメラマンとして最も有名なヘルムート・ラグッツが、この映画で写真家の役で出演している。



『女ひとりのヨット乗り』
主役クリスティーナ・ポヴィライトとモニカ・レンナルツ



ポヴィライトとゲッツ・シューベルト

ALLEZ HOPP [急いで急いで]

→付録Bを参照

ALS MARTIN VIERZEHN WAR 『マルティンが14歳だった時』

児童映画 **監]** ヴァルター・ベック **脚]** マンフレート・リヒター、ヨアヒム・プレトナー **協]** ハンス・シェーンロック **原]** ハンス・シェーンロック作物語『Martin und die Männer (マルティンと男たち)』 **撮]** エーベルハルト・ボルクマン **音]** ヴォルフガング・レッサー **美]** ゲアハルト・ヘルヴィヒ **衣]** ヴェルナー・ベルゲマン **編]** クリステル・エールリヒ **制]** アンニ・フォン・ツィーテン **制社]** グループ「コンクレート」 **長]** 2272m=83分、モノクロ、1964年制作 **封切]** 1964年12月20日 **場所]** ベルリン、「コス



『マルティンが14歳だった時』
ウルリヒ・ロール=バルコとエーリク・フェルドレ

モス」出】ウルリヒ・ロール=バルコ（マルティン）、エーリク・フェルドレ（カール）、ハンス・ハルト=ハルトロフ、ロッセ・レービンガー（父母シュタマー）、フリード・ゾルター（シュティーベ）、マンフレート・ハイネ（フォン・ブレダー）、エルフィ・マン（カトリン）、ヘルムート・シュライバー（父メルテンス）、ハリー・ヒンデミット（フォークト・クロイツァー）、ヴェルナー・カメニク、フレート・ルートヴィヒ、フリッツ・ホーフバウアー、ニコ・トゥロフ、ルドルフ・ウルリヒ他

ストーリー：1920年3月、カップ一揆が起こった時のメクレンブルク地方の村。マルティンは大地主ブレダーが反乱軍のために隠していた大量の武器を見つけ、町の労働者たちに移送する。しかし、マルティンの村でも一揆に反対するストライキが組織される。村民を抑圧するため、兵士たちがやって来る。マルティンは、友達カトリンの助けで町に出向き、労働者大隊に村民への援助を依頼する。そして反乱軍に逮捕されるが、勇敢にも首尾よく逃げ出す。カトリンの父は戦死したが、マルティンが彼女の心の慰めとなる。

解説：東ドイツの児童向け映画には、19世紀前半に生きた年若い主人公の運命を描き、同世代の子供たちの歴史認識を深める目的を持つものがある。このベック監督作品は、青少年観客層に相応しいワクワクするような描き方をしている。

批評：ヴァルター・ベックのこの作品は、子供たちと両親と一緒に鑑賞するのに適している。それだけでなく、幾つかの単に暗示されている歴史の詳細については、補足や説明が必要である。（1964年12月23日 ハインツ・ホフマン、「マルク人民の声」）

演出では、とりわけ主役の若い二人にスポットを当て、彼らが体験する衝撃的な出来事を書くことに力を入れた。（…）物語の中心にあるのは、マルティンと農業労働者メルテンスの娘カトリンとの友情である。父メルテンスは、マルティンの目の前で鉄兜団に銃殺される。メルテンス役のヘルムート・シュライバーは、この映画の中で最も説得力のある達者な演技をしている。（1965年1月14日 G. S.、「ノイエ・ツァイト」）

コメント：1966年の「カンヌ国際青少年映画祭」で表彰される。

-マルティン役を演じたロール=バルコは、この映画の撮影が終わった後、ロストックで石工職人として修業を始めた。

ALS UNKU EDES FREUNDIN WAR ... 『ウンクがエーデの友達だった時…』

児童映画 監】ヘルムート・ジュバ 脚】ハンス=アルベルト・ベデルツァーニ、アンネ・プフォイファー 原】アレックス・ヴェディング作 児童書『Ede und Unku（エーデとウンク）』 撮】ヘルムート・ベルクマン 音】クリスティアン・シュタイヤー 美】ハリー・ロイポルト 衣】ヨアヒム・ディットリヒ 編】クリスタ・ヘルヴィヒ 制】ヴァルター・クロネンタール 制社】グループ「ベルリン」 長】1980m=73

分、カラー、brw、1980年制作 封切】1981年4月3日 場所】ベルリン、「コスモス」 出】アクセル・リンダー（エーデ）、ジャクリヌ・オディ（ウンク）、ミヒャエル・ファルケンハーゲン（マックス）、ニーナ・シュターリッツ（リーザ）、トーマス・ヤーン（シャリアピン）、ハーディ・コルディアン（ニンシ巻きのヴィリー）、マルティン・トレッタウ（父シュベルリンク）、ロッセ・レービンガー（ジブシーの女）、クリストフ・エンゲル（技師エッツ）、ゲルトラウト・ラスト（おしゃべり小母さん）、クリスタ・レーザー、フリッツ・バルトルト、ヴォルフラム・ハンデル、ハインツ・クレーヴェノフ、ハリー・メルケル他

ストーリー：1920年代末のベルリン。12歳のエーデは失業中の父と姉と一緒に貧しい生活を送っている。年上の友達マックスはエーデに、社会問題が政治と関係していることを初めて教えてくれる。エーデは、お金を稼ぐために新聞配達を始めるが、自転車を持っていない。ある日、近所にロマのグループがやって来る。エーデはロマの少女ウンクと仲良くなる。エーデは父親を始め多くの人がロマに対して偏見を抱いているのに気付く。子供たちはエーデを避けるようになる。エーデが自転車を買えるようにウンクがお金を盗んだ時、それまでの皆の心配が現実となり、彼は失望する。しかし、エーデは父も自暴自棄になり盗みを犯したと聞き、ウンクが善意で彼を助けようとしたのだと理解する。

解説：1931年に出版された児童書『エーデとウンク』が、原作の内容に沿い、1980年代という制作当時に適した形で映画化された。

批評：この作品で褒めるべき点は多い。1920年代終末のベルリンが独特の色彩で、的確な社会描写がなされ、リアリズムの中にも詩的情緒が溢れている。そして、元気な（素人の）出演者たちが驚くほど自然体で、カメラを前に同年代の少年少女を演じている。更に褒めるべきは、非常に控え目で、しかも政治状況や登場人物の心情は具体的、また現代社会における道徳観を象徴的に描いていることだ—友情、協力、連帯意識、団結、互いの尊敬。（1981年4月10日 ハンス=ディーター・トーク、「ライプチヒ人民新聞」）

物語は、単純明快にベルリンらしい雰囲気の下、方言を活用した口調で語られる。大袈裟な表現は避け、強い感情も悲壮感も無い。（…）この映画は、稀にみる幸運なケースだ。ブレヒトの言う芸術作品に不可欠な娯楽性を持ち、我々が子供たちに伝えなければならない最も重要なこと、つまり感性を育てることに貢献する。（1981年 レナーテ・ホラント=モーリッツ、「オイレンシュピーゲル 17」）

外国人排斥問題と社会的困窮というテーマで、この映画には時事的な話題性がある。特に美化され誤解されがちな団結という概念を極めて冷静に、子供たちにも分かり易く、しかし単純過ぎない方法で説明する。（1996年『Zwischen Marx und Muck [マルクスとムックの間に]』）

コメント：この映画は、1981年モスクワ国際映画祭で特別審査員賞を受賞した。



エーデ役アクセル・リンダーと父親役マルティン・トレッタウ



『ウンクがエーデの友達だった時…』
リンダーとウンク役ジャクリヌ・オディ

ALTAN ORGOO

→ DIE GOLDENE JURTE 『黄金のパオ』を参照

EINE ALTE LIEBE 『年老いた恋』

【監】 フランク・バイヤー 【脚】 ヴェルナー・ライノフスキ、フランク・バイヤー、ゲアハルト・ハルトヴィヒ
【撮】 ギュンター・マルツィンコフスキ 【音】 ヨアヒム・ヴェルツラウ 【美】 オスカー・ピーチュ 【衣】 ルイーゼ・シュミット 【編】 エフェリン・カーロウ 【制】 エーリヒ・アルブレヒト 【長】 2515m=92分、モノクロ
【原題】 *Alte Liebe rostet nicht* (昔の恋は錆びない) 1958/59年制作 封切) 1959年10月4日 【場所】 ベルリン、リヒテンベルク「フォルクスハウス」 【出】 ギーゼラ・マイ (フリーダ・ヴァルコヴィアク)、エーリヒ・フランツ (アウグスト・ヴァルコヴィアク)、ドーリス・アップエッサー (ヘルガ)、エツァルト・ハウスマン (ロータル)、ペーター・シュトゥルム (ハインリヒ・ランチュ)、ハンス=ペーター・ミネッティ (ベンノ・シュルツェ)、マルゴット・エーベルト (イルムガルト・シュトレマー)、ハリー・ギルマン (オットー・フンケ)、ヴェルナー・リールク (ロイプケ)、ルドルフ・ウルリヒ (ゲオルク)、ギュンター・ジーマン、ペーター・ドルンザイフ、ヨッヘン・トーマス、ハンス・フィノール、ペーター・カリシュ他



エツァルト・ハウスマン、マイ、ルドルフ・ウルリヒ、アルベルト・ツァーンと農民たち

ケ)、ヴェルナー・リールク (ロイプケ)、ルドルフ・ウルリヒ (ゲオルク)、ギュンター・ジーマン、ペーター・ドルンザイフ、ヨッヘン・トーマス、ハンス・フィノール、ペーター・カリシュ他

ストーリー：フリーダとアウグストのヴァルコヴィアク夫婦は、間もなく結婚30年目を迎える。もっとも二人の関係は、以前から余り上手くいっていない。アウグストは、老後を静かに暮らしたいと思っているが、フリーダは、未だ農業協同組合理事長の役職を退く気は無い。地方には様々な問題があり、集団化政策は遅々として進まない。同志ハインリヒ・ランチュでさえ、個人農場経営に執着している。進歩推進派のフリーダには、仕事上の対立や個人的にもケンカが絶えない。ランチュにとって、フリーダの催促だけでなく、彼女の高い地位が目上のたん瘤。結婚記念日のパーティ当日、フリーダは組合から呼び出される。それが引き金となり、一挙に家庭内騒動が始まる。アウグストはフリーダの辞職を求めるがその甲斐もなく、諦めた彼は友人ランチュの所に。娘のヘルガも家を出る。フリーダは倒れて入院。アウグストはようやく冷静になる。

解説：女性が中心にいるこの作品だが、少なくとも俳優たちの演技には説得力がある。



『年老いた恋』 ギーゼラ・マイとエーリヒ・フランツ

集団化対策キャンペーンの終わった後、1960年ヴァルター・ウルブリヒト書記長がこの映画を見て上映を禁止、映画館から回収させたとの噂がある。

批評：表向きのテーマは結婚生活。妻の方に仕事の負担が大きく、家族のための時間が足りないことである。しかし実際には、地方での新しい集団生活と、そこから派生する問題が中心になっている。仕事をするのに一人が良いか仲間と一緒に良いか、言い換えれば個人か共同体か？更に、どのような手段や方法で理解を得ることが出来、新しい労働が定着するのか？ (1959年カール=エドゥアルト・フォン・シュニッツラー、「フィルムシュピーゲル 21」)

フランク・バイヤーの監督デビュー作『ZWEI MÜTTER (二人の母親)』が偶然の出来ではなかったことを証明するシーンは少ない。オーデル川三角州にある村の静かな風景。保護メガネをかけてシャベルで石灰をすくい取る男たちのシュールな衝撃。妻の職務の象徴のように電話のベルが鳴ると、アウグストが激怒し受話器を踏みつけるシーン。結婚記念日のパーティ後、夜中まで片付けをして疲れ切ったフリーダが、翌朝台所のテーブルにアウグストと向かい合って座っているシーン。(1995年トーマス・ハイマン、『Regie: Frank Beyer (監督 フランク・バイヤー)』所収)

コメント：この映画は、東ドイツ建国10周年記念日に間に合わせて完成させた作品で、当日は封切り特別上映が企画された。

ALTER KAHN UND JUNGE LIEBE

『古い舟と新しい恋』*

【監】 ハンス・ハインリヒ 【脚】 ディーター・ノル、フランク・フォーゲル、マンフレート・キーゼラー 【撮】 オイゲン・クラゲマン 【音】 ゲルト・ナチンスキ 【美】 ハンス・ポッペ 【衣】 ゲアハルト・カダッツ 【編】 ヒルデガルト・テゲナー、フェルディナント・ヴァイントラウブ 【制】 ヴェルナー・ダウ 【長】 2185m=80分、モノクロ 仮題) *Sonne über den Seen* (湖上の太陽) 1956年制作 封切) 1957年2月22日 【場所】 ベルリン、「バビロン」 【出】 アルフレート・マーク (船員ボルヒェルト)、エーリカ・ドゥンケルマン (妻マリー)、ゲッツ・ゲオルゲ (息子カール)、グスタフ・ピュティアー (船員フォルベック)、マリア・ホイスラー (姪アンネ)、ホルスト・ナウマン (船長リヒター)、クルト・シュミットヒェン (エルンスト)、エルフィー・ドゥーガル、アリス・プリル、ドロテア・フォルク、フリードリヒ・タイトゲ、ハインツ・クヴェアマン、ヴェリ・ミヒャエリス他

ストーリー：荷役船「マリー」と「アンネ」は、蒸気船「ホルスト」に引かれてベルリンからミューリッツ湖畔のヴァーレンに向かう。ボルヒェルトは「マリー」を所有するが、債務を早く弁済するために積み荷を増やしている。息子のカールには、将来良い暮らしをしてもらいたいと願う。しかし、彼は古い荷役



ゲッツ・ゲオルゲとエーリカ・ドゥンケルマン



『古い舟と新しい恋』ゲオルゲとマリア・ホイスラー